

下  
下  
下

何云ふと、妻、妻、妻ばかり云ふ、親は如何すツか。何をしても涙はッかい云ふ。不孝者奴が。勘當すツぞ」  
武男は唇を噛みて熱涙を絞りつゝ、「阿母、其は餘りてす」  
「何が餘だ」

「私は決して其様な粗略な心は決して持つちや居ないです。阿母に其心が届きませんか」

「其ならわたしが云ふ言を何故聴かぬ？エ？何故浪を離縁せンツか」  
「併し其は——」

「併しもねもンぢや。さ、武男、妻が大事か、親が大事か。エ？家が大事？浪が——？エ、馬鹿奴」  
はつしと火鉢をうちたる勢に、煙管の羅字はほつきと折れ、雁首は空を飛んでたど襖を破りぬ。途端に「はッ」と襖の彼方に固唾をのむ人の氣はいせしが、頓て震ひ聲に「御免——遊ばせ」

「誰？——何ぢや？」

「あの！電報が……」

襖開き、武男が電報をとりて見、小間使が女主人の一晚に會いて半消へ入りつゝ、匆々に去りしまで、僅三分ばかりの間——ながら、此瞬間に二人が間の熱や下りて、暫くは母子ともに黙然と相對しつ。雨はまた一しきり瀧の様に降り洒ぐ。

母は漸く口を開きぬ。眼には未だ怒の閃めけども、語は何處やらに濕を帯びたり。

「喃、武どん。わたしが斯様云ふも、何も卿の爲悪かどすつぢやなかいらの。わたしにや唯ツた一人の卿ぢや。卿に出世をさせて、丈夫な孫抱えて見たかばかいがわたしが樂ぢやがらの」

默然と考へ入りし武男は纔かに頭を上げつ。  
「阿母、兎に角私も」電報を示しつゝ、「此通り出發が急になつて、明



日は遅くも歸艦せにやならんです。一ト月位すると歸つて來ます。其迄は何卒誰人にも今夜の話は黙つて居て下さい。如何な事があつても、私が歸つて來る迄は、待つて居て下さい。」

\* \* \* \* \*

翌日武男は更に母の保證をとり、更に主治醫を訪いて、懇に浪子の上を托し、午後の涼車にて運子に下りつ。涼車を下れば、日落ちて五日の月薄紫の空にかゝりぬ。野川の橋を渡りて、一路の沙はほの聞き松の林に入りつ。林を穿ちて、持棒の黒く夕空に聳ふるを望める時、思ひがけなき瓜音聞ふ。「あゝ、琴を弾いて居る……」と思へば心の臓を撈らるゝ心地して、武男は暫し門外に涙を拭ひぬ。今日は常よりも快よかりしとて、浪子は良人を待ちがてに堪へて久しき琴取り出で、奏しありき。

顔色の常ならぬを訝られて、武男はたゞ夜深し、故どのみ言ひ紛らしつ。約あれば待ち居し晚餐の卓に、浪子は良人と對ひしが、二人共に食すしまず。浪子は心細さを淋しき笑に紛らして、手づから良人のコオトの扣鈕ゆるめるをつけ直し、刷毛もて丁寧にはらひなどするが内に、終列車の時刻迫れば、今は已むなく立上る武男の手

に縫りて  
「良人、最早行ッしやるの？」

「直ぐ歸つて來る。浪さんも注意して、よくなつて居なさい」  
互に志つかと手を握りつ。玄關に出づれば、姥のいくは靴を直し、僕の茂平は停車場まで送るとて手革囊を左手に、月はあれと提燈をもして待ちたり。

「其ぢや姥や、奥様を頼むだぞ。——浪さん、行つて來る。」

「早く歸つて頂戴な」

浪子



領きて、武男は僕が照せる提燈の光を踏みつゝ門を出で、十數歩、ふりかへり見れば、浪子は白き肩掛を打被て、いくと門に近づみ、手巾を打ふりつゝ、「良人、早く歸つて頂戴な」

「直ぐ歸るよ。浪さん、夜氣にうたれると宜かん、早く入ンなさい」

「されど、二度三度ふりかへりし時は、白き姿の朦朧として見へたりしが、頓て路は轉りて其姿も見へずなりぬ。唯三たび早く歸つて頂戴な」

と云ふ聲の後を慕ふて咽び來るのみ。願みれば片破月の影冷やかに松にかゝれり。

(七)の一

「御歸」りの前觸勇ましく、先刻玄關先に二人挽を下りし山木は、早湯に入りて、早咲の花菖蒲の活けられし床を後に、ふうわりとした坐蒲團に胡坐をかきて、さあ此れからが漸々此方の體になりしと云ふ風情。愆には酌人が些無意氣と思ひ親に、併し愉快らしく、妻のあ隅の顔ぢろりと見て、まづ三四盃傾くる處に、婢が持て來し新聞の號外洋燈の光にてらし見つ。

「うゝ朝鮮か。東學黨ますく猖獗。なに清國が出兵したと。さあ大分面白くなつて來たぞ。此れで我邦も出兵する——戦争にならぬ——さあ儲かるぜ。あ隅、前祝だ、卿も一つ飲め。」

「良人、實際戦争にありませうか」

「なるとも。愉快、愉快、實に愉快。——愉快と云や、なああ隅、今日一寸千々岩に會つたが、例の一條も大分掛が行きさうだて」



「まわ、其様かいな。若旦那が納得しやはつたのかいな」  
 「何有、武男さんはまだ歸つて来ないから、相談も納得もありやしな  
 いが、お浪さんがまた血を略いたんだ、所で御隠居も最早駄目だ、  
 武男が歸らん内に斷行すると云つて居るさうだ。今一度千々岩に刺  
 載いて貰へば、大丈夫出来る。武男さんが歸りや中々斷行も六か敷  
 からぬ、其て歸らん内に悉皆處置をつけて了はふと御隠居も思つと  
 るのだて。最早其様なれア此方のものだ。——さ、御臺所、御酌だ」  
 「お浪はんも可愛想やな」  
 「御身も餘程變ぢきな女だ。お豊が可愛想だからお浪はんを退いて貰  
 はうと云ふかと思へば、最早出来さうになると今度アお浪さんが可  
 愛想！其様な馬鹿な事は中止として、今度はお豊を後釜に据る計畧  
 が肝腎だ」  
 「ても良人、留守にお浪はんを離縁して、武男はん——若旦那が承知

しなはるまいがな、なわ良人——」  
 「さあ、武男さんが歸つたら怒るだらうが、離縁してしまつて置けば、  
 歸つて来て如何怒つても仕様がな。加之武男さんは親孝行だから、  
 御隠居が泣いて見せなさりア、まわ泣寝入だな。其方は其で宜とし  
 て、諸肝腎要のお豊姫の一條だが、兎に角武男さんの火の手が少し  
 鎮まつてから、食料つきの行儀見習とでも云ふ口實で、無理に押か  
 けるだな。何有、六か敷やうでも易いものさ。御隠居の機嫌さへと  
 りア出来るこつた。お豊がいよいよ川島男爵夫人になりア、彼女は  
 戀が叶ふと云ふものだし、乃公はさしより男役で、武男さんは彼様  
 な坊ちゃんだから、川島家の財産は先づ乃公が扱つて遣らなけりや  
 ならん。頗る妙——いや妙な役を受持つて、迷惑ぢやが、其はまわ  
 仕方がないとして、諸お豊だがな」  
 「良人、最早御飯になはれな」







「替古までした令嬢にや似合ンぞ。さうだく左様山形に似くものだ」  
 早や陶然と色づきし山木は、妻の留むるを更に幾盃か重ねつゝ、「嗚  
 お隅、お豊が斯様化粧した所は随分別嬪だな。色は白し——」  
 お豊は莞爾して體をSの字形に捻りつ。  
 「姿は好し。内ぢや其様もまいが、外に出りや一寸御世辭もよし。惜  
 い事には阿母に背て少し反齒だが——」  
 「良人——」お隅は少し顔を顰める。お豊は牡丹餅のあとに酢でも  
 されし心地して、彼甘さと此酸きと腹の中に搗ち合ひて、——甘酸  
 顔をなしつ。  
 「眼尻を今三分上げると女振が上がるがな——」  
 「良人——」お隅は夫の口に戸あらは閉たき心地。  
 「こら、お豊何を怒るのだ？ふくれると嫌振が下がるぞ。何も其様不  
 景氣な顔をせんでも可い、嗚お豊。卿が嬉しがる話があるのだ。さ

お話質に一盃注げ——」  
 滌々と注がせし猪口を一息に仰飲りつゝ、山木は快よげに打笑ひて  
 「嗚お豊、今も阿母と話したとどだが、卿も知つとるが、武男さんの  
 串だかの——」  
 空しき槽櫃の間に不平臥したる馬の春草の香しきを聞ける如く、お  
 豊はふつと頭を掻けて兩耳を引つ立つ。  
 「卿が寫眞を引抓いたりしたもんだから到頭浪子さんも崇られて——」  
 「良人——」お隅夫人は三たび眉を顰めつ。  
 「此れから本題に入るのだ。兎に角浪子さんが病氣が悪い、と云ふン  
 で、まあ離縁になるのだ。否、まだ先方に談判はせん、浪子さんも  
 知らんさうぢやが、兎に角近い内に其様なりさうなのだ。所で其方  
 の處置がついたら、徐々後釜の賣つけ——いや此處だて、乃公も阿  
 母も卿をさ、まあお浪さんの後に入りたいと思つて居るのだ。いや、



左様直ぐ——と云ふ譯にも行くまいから、まあ卿を小間使、これさ、其様愕せんでも宜いわ、まあ候補生の積りで、行儀見習と云ふ名義で、川島家に入り込ますのだ。——御隠居に頼むて、な宜いかい、此處だて——」

一息つきて、山木は妻と女の顔を彼より此と見やりつ。

「此處だて、なふ豊。少し早い様だが——云て聞かして置く事がある

がの。卿も知るとる通り、彼武男さんの母御——御隠居は、評判の病

癪持の、我儘者の、頑固の——おつと卿が母御を悪口しちや濟まん

がの——兎に角此處に坐つて御出の此阿母の様に——やさしくない

人だて。併し鬼でもない、蛇でもない、矢張人間ぢや。其呼吸さへ

飲込むと、鬼の娘でも蛇の女房にでもなれるものぢや。何有、彼隠居

位、乃公が女なら二日も傍へ居りや豆腐の様にして見せる。——と自

慢した所で、仕方がないが、實際彼様な老人でも扱ひ様ぢや何でも

ないて。所で、宜いかい、あ豊。卿がいよく先方へ、まあ小間使兼細君候補生として入り込む時になると、第一今の様に怠慢て居ちや

ならん、朝も早く起きて——老人は眼が早く醒めるものぢや——外

の事は如何でも宜いとして、御隠居の要をよく達すのだ。宜いかい。

第二にはだ、今の様に何と云へば直ぐ怒れる様ぢや不可ない、何て

も彼でも負けるのだ。宜いかい。叱られても負ける、無理を云はれ

ても負ける、斯方が是りや猶負ける、な。さうすると先方で折れて

来る、な、此處がよく云ふ負けて勝つのだ。決して腹を立つちやい

かん。宜か。それから第三にはだ、——此は少し早過ぎるが、序だか

ら云つとくがの、無事に婚禮が済むだつて、宜いかい、決して武男さ

んと仲が宜過ぎちや不可ない。何さ、内々は如何でも宜いが、表面

の所をよく注意しなけりや不可んぜ。姑御には馴々しくさ、成丈近

くして、婿殿にや姑の前で毒にならん程の小悪口もつく位でなけり



やならぬ。可笑しいもので、吾子の妻だから夫婦仲が好いと嬉しがりさうなもんぢやが、實際あまり好いと姑の方では面白く思はぬ。まわ一種の嫉妬——吾儘だ。てなくも、あまり夫婦仲が好いと、自然姑の方が疎密になる——と、まわ姑の方では思ふだ。浪子さんも一つは其處でやり損なつたかも知れぬ、仲が好過ぎての——あつと、其様角が生へさうな顔しちゃ不可ない、ねえお豊。今云つた負けるのは其處ぢやぞ。所で、宜かい、成丈注意して、此女は眞に吾の(姑)の(媳)だ、子息の妻ぢやない、と云ふ様に姑に感じさせなけりやならん。姑の喧嘩は大抵此の若夫婦の仲が好過ぎて、姑に孤立の感を起さすから起るのが多いて。宜かい、脚は御隠居の媳だ、と其様思つて居なけりやならん。何有御隠居が追付目出度なつた後ぢや、武男さんの首ッ玉にかぢりついて、ぶら下つてあるいても構はし。また併し姑の前では、決して武男さんに横目でも遣ちやならぬぞ。また

あるが、其はいざ乗込の時に云つて聞かす。此三ヶ條は中々面倒ぢやが、併し脚も戀しい武男さんの奥方にならうと云ふンぢやないか。辛抱が大事ぢやぞ。明日と云はずに今夜から其替古を始めるのだ」言葉の中に、襖開きて、小間使の竹「御返事が要るさうでムいます」と一封の女筆の手紙を差し出しぬ。封を抜きてすうと眼を通したる山木は、手紙を妻と女の眼さきに閃らしつゝ、

「如何だ、川島の御隠居から直々来て呉れは！」

(七)の三

武男が艦隊演習に赴ける二週の後、川島家より手紙して山木を招ける數日前、返子に療養せる浪子はまた咯血して、急に醫師を招きつゝ。



幸にして略血は一回にしてやみ、醫師は當分事無かる可きを保證せしが、此報は少なからぬ刺戟を武男が母に與へぬ。間兩三日を置き、門を出づること稀なる川島未亡人の危大なる體は、飯田町なる加藤家の門を入りたり。

離婚問題の母子の間に争はれつる彼夜、武男が辭色の思ふにまして厲しかりしを見たる母は、流石に其請に任せて彼が歸り來る迄は黙止す可き約をばなしつれど、設令其迄待てばとて武男が心は容易に移す可くもあらずして、却て時經つ程彼が愛着の圖はいよいよ絶ち難かる可く、且思ひも寄らぬ障礙の出で來る可きを思ひしなり。然れば其子の未だ歸らざるに乗じて、早く處置をつけ置くの寧ろ得策なるを思ひしが、然りとて流石に彼言質もあり此願慮もまた無きにあらずして、其心はありながら、いまだ時々來ては帰る千々岩を満足さすほどの果斷なる處置をば爲さざるなりき。浪子が再度略血の

報を聞くに及びて、母は決然として會て媒妁をなし、加藤家を訪ひたるなり。

番町と飯田町と云は、眼と鼻の間に棲みながら、何時なりしか媒妁の禮に來しより殆んど顔を見せざりし川島未亡人が突然來訪せし事の尋常にあらざる可きを思ひつゝ、慇懃に客間に請せし加藤夫人も、其話の要件を聞くよりはた胸をつきぬ。其會て片岡川島兩家を結びたる手もて、今や其繋げる糸を絶呉れよとは！

如何なる顔の如何なる口あれば然る事を言はるゝかと、加藤夫人は今更の様に客の容子を打眺めぬ。見れば何時にかはらぬ肥満の體格、太き兩手を膝の上に組み、膚撓まず、眼逃かず、口を漏るゝ齒辯の淀もやらぬは、戯にあらず、狂氣せしにもあらで、まさしく分別の上と思へば、驚愕はまた胸を衝く慣りにかはりつ。餘り勝手な言條と、罵倒せむずる言の已に咽元まで出でけるを、實の娘とも思ふ



水

浪子が一生の浮沈の境と、幾かに飲み込みて、先づ問ひつ、また説きつ、宥めもし、請もしつれど、吾事をのみ云ひ募る先方の耳には、毫も入らで、却て其は入らぬ縁言、此方の話を浪の實家に傳へて貰へば、要は濟むと云ふ風の明らかに見ふれば。話聞くこと病める姪の顔、亡妹——浪子の實母——の臨終、浪子が父中將の傷心、など胸の中にあはれ來り亂れ去りて、情なく腹立しき涙の吾知らず催し來れる夫人は、屹度容をあらため、當家に於ては御兩家の結縁の爲めにこそ御加勢もいたしつれ、然る不義非情の御加勢は決して出來ぬこと良人に相談する迄もなく其義は堅く御断、ときつばりと刎ねつけつ。

忿然として加藤の門を出でたる武男が母は、即夜手紙して山木を招きつ。(篤實なる田崎にては埒明かずと思へるなり)。折も折とて主人の留守に、且は惑ひ、且は怒り、且は悲める加藤子爵夫人と千鶴子

と心を三方に碎きつ、母は然云へど如何にも武男の素意にあるまじと思ふより、其乗艦の所在を糺して至急の報を發せる間に、焦躁に焦躁し武男が母は早直接談判と心を決して、其使節を命ぜられたる山木の車は己に片岡家の門にかゝりしなり。



(八)の一

山木が車赤坂氷川町ある片岡中將の門を入れる時、恰も英姿颯爽たる一將軍の栗毛の馬に跨りつゝ出で來れるが、車の駆け込みし響に不圖驚きて、馬は竿立になるを、馬上の將軍は馬丁を援はす迄もなく、轡を絞りて容易に乗り静めつゝ、一回圈を畫きて、憂々と歩ませ去りぬ。

見事の武者振を見送りて、聲づくろいして嚴しき中將の玄關にかゝれる山木は、幾多の權門を潜り馴れたる身の、常にはあるまじく膽落つるを覺へつ。昨夜川島家に呼ばれて、其使命を托されし時も、頭を掻きつるが、今現に此場面臨みては彼は實に大なりと誇れる膽の猶小にして、其面皮の未だ十分に厚からざるを憾みしなり。

名刺一たび入り、書生二たび出て、山木は應接間に導かれつ。卓子の上には清韓の地圖一葉廣げられたるが、まだ清めもやらぬ火皿

のマッチ卷蕘の骸と共に、先座の話を略想はしむ。實にも東學黨の亂、清國出兵の報、我出兵の噂、相ついて海内の注意一に朝鮮問題に集れる今日此頃は、主人中將も豫備にこそ居れ自づから事多くして、また彼英文讀本を手にするの暇ある可くも思はれず。

山木が椅子に倚りて、ぎよろく四邊を眺め居る時、遠雷の鳴るが如き足音次第に近づきて、頓て小山の如き人は緩やかに入りて主位につきぬ。山木は中將と見るより周章て起てる拍子に、吾かけて居し椅子をば後さまに撞と蹴倒しつ。「呀、此は疎勿を」と叫びつゝ、狼狽して引き起し、然る後二つ三つ四つ續けさまに主人に向ひて丁重に辭儀をなしぬ。今の疎忽の謝も交れるなるべし。

「さあ、何卒御かけ下さい。貴君が山木君——御名は承知しちよつたですが」

「はッ。此は初まして、手前は山木兵造と申す不調法者で(句毎に



辭儀しつ、辭儀する毎に椅子は嬉々として軋りぬ、仰の如くと笑へる様に……何卒今後とも御最負を……」  
 避け得られぬ閑話の兩三句、朝鮮の噂の三兩句——然る後中將は言をあらためて、山木に來意を問ひつ。  
 山木は口を開かんとして先づ堅睡をのみ、堅睡をのみてまた堅睡をのみ、三たび口を開かんとしてまた堅睡をのみぬ。彼は毎に誇る其流滑自在なる舌の今日に限りてひたと溢るを怪めるなり。

(八)の二

山木は緩かに口を開き、

「實は今日は川島家の御名代で罷出ましたので」

思ひかけずと云はむが如く、主人の中將は其體格に似合はぬ細眼を

山木が面に注ぎつ。

「はあ？」

「實は川島の御隠居が御出になる所てムいませうが——まわ私が罷出ました次第で」

「成程」

山木は頻りに滲み出づる額の汗押拭ひて「實は加藤様から御話を願いたいと存じましたんでムいませうが、——少し都合もムいまして——」

「私か罷出ました次第で」

「成程。て、御要は？」

「其要と申しますのは、——申兼ねますが、其の實は川島家の奥様——浪子様——」

主人中將の眼は瞬もせず暫し話者の面を打まもりぬ。

「はあ？」



「其の、浪子様でムいすが、如何も斯様な事は實以て申上難い御話  
てムいすが、御承知通り彼御病氣につきましましては、手前共——川  
島でも、餘程心配を致しまして、近頃では少しは御快い方ではムい  
ますが——まあ御目出度ムいすが——」

「成程」

「手前共から、斯様な事は誠に申上げられぬのでムいすが、甚だ勝  
手がましい申條でムいすが、實は御病氣柄ではムいすし——御  
承知通り川島の方でも家族と申しましても別にムいせんし、男子  
と申しては先づ當主の武男——様丈でムいすんで、實は御隠居も  
餘程心配を致して居りまして、如何も實以て申難い——如何にも身  
勝手な話でムいすが、御病氣が御病氣で、其の、萬一傳染——ま  
あ其様な事も滅多にムいすまいが——併し何方かと申しますと矢  
張其の、其恐も無いではムいせんので、其の、萬一武男——川島

の主人に異變でもムいすすと、まあ川島家も斷絶と申す譯で、其の  
斷絶致しても宜い様なものでムいすが、何分にも其の、實以て如  
何も其の、誠に濟みませんが其の、其處の所を其の、御病氣が御病  
氣——」

言ひ淀み言ひをくくれて一句一句に額より汗を流せる山木が顔瞻視  
りて黙然と聞き居たる主人中將は、此時右手をあげ、

「宜しい。分りました。畢竟浪が病氣が險呑ぢやから、引取つて呉れと、  
仰有るのぢやな。宜しい、分りました」

頷きて、手元近く燃へ退れる葉巻を卓子の上なる灰皿にさし置さつ  
、腕を組みぬ。

山木は陥み込める泥濘より手をとりて引き出されし様に、ほつと息  
つきて、額上の汗を拭ひつ。

「左様でムいす。實以て申上難い事でムいすが、其の、何卒其處



の所を悪しからず——」

「で、武男君は最早歸られたですな？」

「否、未だ歸りませんでムいますが、勿論此は同人承知の上の事でム  
いまして、何卒悪しからず其の——」

「宜しう」

中將は頷きつ。腕を組みみて、暫し眼を閉ぢぬ。思の外に容易運びけ  
るよ、と密かに笑坪に入りて眼をあげたる山木は、眼を閉ぢ口を結  
びて宛ながら睡れる如き中將の相貌を仰ぎて、流石に一種の畏を覺  
へつ。

「山木君」

中將は眼を睜きて、山木の顔を熟々と打眺めたり。

「はッ」

「山木君、貴君は子を持つて居でかな」

其問の見當を定めかねたる山木は頷りに頭を下げつ、「はッ。愚息  
が一人に——娘が一人でムいまして、何分御引立を——」

「山木君、子と云ふやつは可愛者ぢや」

「はッ？」

「いや、宜しい。承知しました。川島の御隠居に其様云つて下さり、  
浪は今日引取るから、御安心なさる様に。——御使者御苦勞ぢやつた」  
使命を全ふせしを慶ぶか、流石に氣の毒と詫ぶるにか、五つ六つ七  
八つ續けさまに小腰を屈めて、どきまぎ立ち上る山木を、主人中將  
は玄關迄送り出して、歸り入る書齋の戸をばはたと閉したり。

ハッ、ッ



(九)の一

返子の別荘にては、武男が出發後は、病める身の心細さ遣る方なく思ふほどいよ／＼長き日一日の流石に暮せば暮らされて、早や一月あまり経たれば、麥苜濟みて山百合咲く頃となりぬ。過ぐる日の略血に、一たびは氣落ちしが、幸にして醫師の言へるが如く其後に著しき衰弱もなく、先日箱館よりの良人の書信にも歸來の近かるべきを知らせ來つれば、設令良人を驚かす程には到らぬとも、略血の前程にはなり居らではと、自から氣を勵まし、浪子は薬用に運動に細かに醫師の戒を守りて攝生しつゝ、指を折りて眞人の歸期を待ちぬ。然るにても此四五日、東京たよりのはたと絶へ、番町の宅よりも、實家よりも、飯田町の伯母よりすらも、はがき一枚來ぬことの何となく氣にかゝり、今しも日永の手すさびに山百合を生くとして下葉を剪み居れる浪子は、水さし持ちて入り來し姥のいくに

「ねえ、婆や、些も東京のたよりが無いのね。如何したのだらう？」  
 「左様でムいますねえ。御かわりもないんでムいませう。もう其内には參りませうよ。斯様申して居ります内に何人ぞ入來やるかも分りませんよ。本當に何て奇麗な花でムいませう、ねえ、奥様。これが萎れない内に旦那様が御歸り遊ばすと宜うムいますのに、ねえ奥様」

浪子は手に持ちし山百合の花瞻視りつゝ、「奇麗。でも、山に置いといた方が宜のね、剪るのは可愛想だわ！」  
 二人が問答の間に、一輛の車は別荘の門に近づきぬ。車は加藤子爵夫人を載せたり。川島未亡人の要求を刎ねつけし其翌日、子爵夫人は氣にかゝるまゝに、要に托して車を片岡家に走らせ、こゝに初めて川島家の使者が早くも直接談判に來りて、己に中將の承諾を得て去りたる由を聞きつ。武男を待つ企も今は空くなりて、且つ驚き



且つ嘆きしが、せめては姪の迎（手放し置きて、其と聞かさば不慮の事の起りもやせむ、兎に角膝下に呼び取つて、と中將は慮れるなり）にと、直ぐ其足にて返子には來りしなり。

「まめ。よく……恰今噂をしてみましたの」

「本當によくまめ……如何でムいます、奥様、姪やが言は當りましてムいませう」

「浪さん、鹽梅は如何です？最早彼後何も變つた事もないのかい？」と伯母の眼は一寸浪子の面を掠めて、側へ剪れぬ。

「は、快方ですの。——それよりも伯母様は如何なすつたの、大變に顔色が悪いわ」

「わたしかい、何ね、少し頭痛がするものだから。——時候の故だらうよ。——武男さんから便がありましたか、浪さん？」

「昨日、ね、函館から。最早近々に歸りますッて——否、何日と云

ふ事は定らないのですよ。御土産があるなッを書いてありましたわ」

「左様？晚い——ね——最早——最早何時？二時だ、ね！」

「伯母様、何を其様に躁々して御出なさるの？御寛なさいな。お千鶴さんは？」

「あ、宜くッて、ね」云ひつゝ、いくが持て來し茶を受取りしまゝ、飲もやらす沈吟じつ。

「何卒御寛りと遊ばせ。——奥様、一寸御着を見て参りますから」

「あ、其様してお呉れな」

伯母は打驚きたる様に浪子の顔を一寸見て、また眼を翳しつゝ、「お止な。今日は緩されないよ。浪さん——迎に來たよ」

「エ？迎？」

「あ、阿爺が、病氣の事で醫師と少し相談もあるから一寸來る様にッてね、——番町の方でも——承知だから」



「相談？何でせう」

「病氣の件ですよ、其れからまだ——阿爺も久しく會はンからツてね」

「其様ですの？」

浪子は怪訝な顔。いくも不審議に思へる様子。  
「でも今夜は御泊り遊ばすンでムいませう？」

「否ね、彼方でも——醫師も待つてたし、暮あい間が宜から、直ぐ今度の流車でね」

「へー——」

姥は驚きたるなり。浪子も臍に落ちぬ事はあれど、云ふは伯母なり、呼ぶは父なり、阿姑の承知の上とも云へば、兎も角も云はるゝまゝに用意をば整へつ。  
「伯母様何を考へ込んでいらッしやるの？——看護婦は行あくも宜で

せうね、直ぐ歸るのでせうから」  
伯母は起ちて浪子の帯を直し襟を揃へつ、「連れて御出なさいね、不自由ですよ」

\* \* \* \* \*

四時頃には用意成りて、三挺の車門に待ちぬ。浪子は風通御召の單衣に、御納戸色緞珍の丸帯して、髪は揚巻に山梔の花一輪、草色の洋傘右手につき、漏れ出る咳嗽を白綾の手巾におさへながら、  
「姥や、一寸行つて来るよ。あゝあ、久し振に歸京のね。——それから、彼の——御單衣ね、今些しだけども——あ、宜いよ、歸つてからしませう」  
忍びかねてほろ／＼落る涙を伯母は洋傘に押隠しつ。



(九)の二

運命の抗闘々として人を待つ。人は知らず識らず其運命に歩む。即ち知らずと云ふとも、近づくに従ふて一種冷やかなる氣はいを感ずるは、誰も然る事なり。

伯母の迎、父に會ふの喜に、深く仔細を問はずして歸京の途に上りし浪子は、車に上るより頻りに胸打騒ぎつ。思へば思ふ程腑に落ちぬこと多く、唯頭痛とのみ云ひ紛らし、伯母が容子のたゞならぬも深く藏せる事のありげに思はれて、問はむも氣車の内人の手前、其もなり難く、新橋に着く頃は唯此暗き疑心のみ胸に立ち迷ひて、久し振なる歸京の喜も殆んど忘れぬ。

皆人の下りし後より、浪子は看護婦に扶られ伯母に従ひて徐ろにブラットフォームを歩みつ、改札口を過ぎける時、彼方に立て話し居れる陸軍士官の一人、ふつと此方を顧みて恰も浪子と眼を見合はし

。千々岩！彼は浪子の頭より爪先まで一瞥に測りて、故らに目禮しつゝ、笑ひぬ。其一瞥、其笑の怪しく胸にひいてきて、頭より水酒がれし心地せし浪子は、迎の馬車に打乗りし後まで、病の故ならて更に悪寒を覺へしなり。

伯母は言はず。浪子も黙しぬ。馬車の窓に輝やきし夕日は落ちて、氷川町の邸に着けば、黄昏ほのかに栗の花の香を浮べつ。門の内外には荷車釣臺など見へて、脇玄關にランプの火光さし、人の聲す。物など運び入れしさまなり。浪子は何事のあるぞと思ひつゝ、伯母と看護婦に扶けられて馬車を下れば、玄關には婢にランプとらして片岡子爵夫人才みたり。

「あゝ、此れは早く。御苦勞さまでました」と夫人の眼は浪子の面より加藤子爵夫人に走りつ。

「阿母、御變りも……阿爺は？」



「は、書齋に」

折から「姉さまが来たよ姉さまが」と小供の聲賑やかに二人の幼弟妹走り出て来りて、其母の「静かになさい」と窘むるも顧みず、左右より浪子に絶りつ。駒子もついで出て来りぬ。

「あゝ道ちゃん、毅一さん。如何だえ？」あゝ駒ちゃん

道子は絶れる姉の袂を引動かしつ、「あたし嬉しいわ、姉さまは最早今後始終此家に居るのね。御道具も悉皆来てよ」はつと聲もなし得ず、子爵夫人も、伯母も、婢も、駒子も一齊に浪子の面を瞻視りつ。

「エ？」

駭きし浪子の眼は繼母の顔より伯母の顔を掠めて、忽ち玄關側の室も狭しと積まれたるさまくの道具に注ぎぬ。まさしく良人宅に置きたる吾箆筒！長持！鏡臺！

浪子は戦々と震ひつ。倒れむとして伯母の手を確と捉へぬ。皆泣きつ。

重やかある足音して、父中將の姿見へ来りぬ。

「お、阿爺！！」

「あゝ、浪か。待つて——居た。よく、歸つて呉れた」

中將は其大なる胸に、戦々と震ふ浪子をばかき抱きつ。

半時の後、家の内森とありぬ。中將の書齋には、父子唯二人、再び歸らじと此家を出てし日別の訓戒を聞きし時其まゝに、浪子は跪きて父の膝に咽び、中將は咳き入る女の背を徐ろに撫て下ろしつ。

浪子に二枚の書齋へ来たよ姉さまが

三つ

感



(十)

「號外! 號外! 朝鮮事件の號外!」と鈴の音の魂消しう呼びあるく新聞賣子のあとより、一挺の車からく番町なる川島家の門に入りたり。武男は今しも歸り來れるなり。

武男が歸らば立腹もす可けれど、勝は畢竟先の太刀、思ひ切つて武男が母は山木が吉報を齎らし歸りし其日、善は急げと媳が簞笥諸道具一切を片岡家に送り戻し、些殺生ではあつたれど、到底其まゝに置かれぬ腫物、切つてしまつて安心と此二三日近頃になき好機嫌の其に引かへて、若夫婦方なる僕婢は氣の毒とも笑止とも云はん方なく、今にもあれ旦那が御歸りなされば、如何に孝行の方とて、中々一通りては濟むまじとはらく思つて居たりし武男は今歸り來れるなり。加藤子爵夫人が急を報せし其書は途中に往き違ひて、素より母は其と云ひ送らねば、知る由もなき武男は横須賀に着きて暇

を得るや否急ぎ歸り來れるなり。

今奥より出で來りし仲働は、茶を入れ居りし小間使を手招ねき、

「ねエ松ちゃん。旦那様は些も御存じない様ぢやないか。奥様に御土産なんぞ持つていらつしたよ」

「本當にどいね。何處の世界に、旦那の留守に奥様を離縁してしまふ母御があるものかね。旦那様の身になつちやア、腹も立つ筈だわ。鬼婆め」

「彼位嫌な婆つちやありやしない。客々の、分からずやの、人を叱り飛ばすが御職掌だからね、何も御存じなしの癖にさ。其筈だよ、ねエ、昔は薩摩でお芋を掘つてたんだもの。わたしや最早此様な家に居るのが、染々嫌になつちやつた」

「でも旦那様も旦那様ぢやないか。御自身の奥様が離縁されてしまふのも些も知らんてえのは、餘り七月の御槍ぢやないかね」



「だって、其ア無理やないわ。遠方に居らつしたんだもの。誰だつて、下女ぢやあるまいし、肝腎な子息に相談もしずに、さつさと媳を追出して仕舞はうた思はないわね、加之旦那様も御年が若いからねエ。本當に旦那様も御可愛想——奥様は猶御可愛想だわ。今頃は如何してらッしやるだらうねエ。あゝいやだ——ほりら、婆が怒鳴りだしたよ。松ちやんせッせとしないと、また八當りて御出るよ。奥の一間には母子の問答次第に然しつ。」

「だって、彼時彼程申上げて置いたです。其に手紙一本下さらず、無断で——實にひどいです。實際ひどいです。今日も一寸返子に寄つて来ると、浪は居らんでせう、いくに尋ねると何か要があつて東京に歸つたと云ふです、變と思つたですが、まさか母上が其様な事を——實にひどし——」

「其はわたしが悪かつた。悪かつたから此の通り親が詫をして居るぢやなッかい。わたしぢやッて何も浪が悪かと云ふぢやなし、卿が可愛いはッかいで——」

母上は身體はッかり大事にして、名譽も體面も情も些も思つて下らんのですな。餘りです」

「武男、卿はの、男かい、女ぢやあるまいの。親に詫言云はせても、矢張浪が戀しいかい。戀しいかい。戀しいか」

「だって、餘りです、實際餘りです」

「餘りぢやッて、最早後の祭ぢやなッか。彼方も承知して、奇麗に引取つたあとの事ぢや。此上如何すッかい。女々し加事をしなはッて、親の耻ばッかいか、卿の男が立つまいが、さ男が立つまいが」

「默然と聞く武男は断れよとばかり下唇を噛みつ。忽ち勃然と立ち上つて、病妻に齧らし歸りし貯林檎の籠を微塵に踏み碎き、

「阿母、あなたは、浪を殺し、加之此武男を御殺しなすツた。最早御



眼にかゝりません」

武男は直ちに横須賀なる軍艦に引返へしぬ。

韓山の風雲はいよ／＼急に、七月の中旬廟堂の議は愈清國と開戦に

一決して、同月十八日には樺山中將新に海軍軍令部長に補せられ、

武男が乗組める聯合艦隊旗艦松島號は他の諸艦を率ゐて佐世保に集

中す可き命を被りつ。捨ばちの身は砲丸の的にもなれよと、武男は

蕪地に艦と共に西に向ひぬ。

片岡陸軍中將は浪子の歸りし其翌日より、自ら指圖して、郎中の日

あたりよく静かなる遊りを擇びて、特に浪子の爲めに八疊一間六疊

二間四疊一間の離家を建て、返子より姪のいくを呼び寄せて、浪子

と共に此處に棲ましつ。九月にはいよ／＼命ありて現役に復し、一

夕夫人繁子を書齋に呼びて懇々浪子の事を托したる後、同十三日大

藤に扈從して廣島大本營に赴き、翌月更に大山大將山地中將と前後

して遼東に向いぬ。

我曹が次を逐ふて其運命を辿り來れる敵も、味方も、彼銷魂も、此

怨恨も、誓し征清戦争の大渦に卷込れつ。



(一)の  
 明治二十七年九月十六日午後五時、我聯合艦隊は戦闘準備を整へて大同江口を發し、西北に向いて進みぬ。恰も運送船を護して鴨綠江口附近に見へしと云ふ敵の艦隊を尋ね出して、雌雄を一戦に決せむとするなり。

吉野を旗艦として、高千穂、浪速、秋津洲の第一遊撃隊、先鋒として前にあり。松島を旗艦として千代田、嚴島、橋立、比叡、扶桑の本隊之に續ぎ、砲艦赤城及軍見物と稱する軍令部長を載せし西京丸また其後に隨ひつ。十三隻の練艦一縦列をなして、午後五時大同江口を離れ、仰びつ縮みつ龍の如く黄海の潮を捲いて進みぬ。頓て日は海に入りて、陰曆八月十七日の月東にさし上り、艦は金波銀波を

さいめかして月色の中を駛る、旗艦松島の士官次室にては、晚餐とく済みて、副直其他要務を帯びたるは久しき前に出て去りたれど、猶五六人の残れるありて、談まさに興に入れなるべし。舷窓をば火光を漏らさじと閉したれば、温氣内に籠りて、左らぬだに血氣盛りの顔はいよく紅に照れり。卓の上には珈琲碗四五個、菓子皿は概ね夷けられて、唯カステラの一片が何れの少將軍に屠られむかと競々として心細氣に横はるのみ。

「陸軍は最早平壤を陥したかも知れないね」と短小精悍とも云ひつ可き一少尉は頬杖つきたるまゝ一坐を見廻はしたり。「然るに此方は如何だ。實に不公平も亦甚しと云ふ可しぢやないか」  
 「でつぷりと肥へし小主計は一隅より莞爾と笑ひぬ。「何せ幕が明くと直ぐ濟んでしまふ演劇ぢやないか。幕合の長いのもまた一興だよ」



「なんて悠長な事を言ふから困るよ。北洋艦隊相手の盲埵戯も最早吾輩は厭々だ。今度も懸違いまして御眼にかゝらんけりや、吾輩は、だ、長驅渤海灣に乗り込んで、太沽の砲臺に砲丸の一も御見舞申さんと、勘忍袋が堪らん」

「其れこそ袋の中に入るも同然、歸路を絶たれたら如何です？」真面目に横槍を入れるは候補生の某なり。

「何、歸路を絶つ？望む所だ。併し悲い哉君の北洋艦隊は其程敏捷にあらずだ。あへてけちをつける譯ぢやないが、今度も見參は些覺束

ないね。支那人の氣の長いには實に閉口する」折から靴音の近づきて、丈高き一少尉入口に立ちたり。

短小少尉はふり仰ぎ「あゝ、航海士、如何だい、何も見へんか」

「月ばかりだ。點檢が済んだら、須らく寝て觀氣を蓄ふ可した」云ひつゝ、菓子皿に残れるカステイラの一片を頬張り「むゝ、少し……甲板

板に出で居ると……腹が減るには驚く。——從卒、菓子を恵つて來い」

「君も随分食ふね」と赤き襯衣を着たる一少尉は微笑みつ。

「借問す君は如何だ。菓子を食つて老人組を罵倒するは、蓋し我輩士官次室の英雄の特權ぢやないか。——如何だい、諸君、兵は皆明日を

待詫て、眼が冴へて困ると云つてるぞ。此で失敗があつたら實に兵の罪にあらず、——の罪だ」

「吾輩は勇氣については毫も疑はん。望む所は沈勇、沈勇だ。無手法は困る」と云ふは此仲間にての年長なる甲板士官。

「無手法と云へば、○番分隊士は實に驚くよ」と他の一人は言を挿みぬ、「勉勵も非常だが、第一如何に軍人は生命を愛まんからつて、命

の安賣は此處ですと看板もかけ兼ねん勢は餘りだと思ふね」

「あゝ、川島か、何時だツたか、そうい、威海衛砲撃の時だツて彼様も險呑き事を道つたよ。川島を司令長官にしたら、其れこそ三番



分隊士ぢやないが、艦隊を渤海灣に連れ込んで、太浩所ぢやない、白河を溯つて李爺を生擒るなんぞ言ひ出すかも知れん」  
 「加之、容子が以前とは悉皆違つたね。非常に怒るよ。何時だつたか僕が川島男爵夫人の事についてさ、少し調戲かけたら、眞黒に怒つて、あぶなく鐵拳を頂戴する所さ。僕は鎮遠の三十珊より實際〇番分隊士の一拳を恐るゝね。はゝゝ、何か仔細があると思ふが、赤禰衣君、君は川島と親しくするから恐らく秘密を知つとるだらうね」と航海士はガリバルチーと云はれし赤禰衣少尉の顔を見たり。  
 折から從卒の堆く盛れる菓子皿を持ち來りて、士官次室の話は暫し腰斬となりぬ。

(一)の二

夜十時點檢終り、差當る職務なきは臥し、餘はそれ〳〵方面の務に就き、高聲火光を禁じたれば、上甲板も下甲板も寂として宛ながら人無き様になりぬ。舵手に令する航海長の聲の外には、唯煙突の煙の洩々として白く月に漲り、螺旋の波をかき、大なる心臓の拍つが如く小止なき機關の響の艦内に満てるのみ。  
 月影白き前艦橋に、二個の人影あり。其一は艦橋の左端に凝立して動かず。一は靴音靜かに、墨より黒き影を曳きつゝ、五歩にして止まり、十歩にして返へる。  
 此は川島武男なり。此艦の〇番分隊士として、當直の航海長と共に、副直の四時間を艦橋に立てるなり。  
 彼は今艦橋の右端に達して、双眼鏡をあげつ、艦の四方を望みしが、見る所なきものゝ如く、右手を下ろして、左手に欄干を握りて立ちぬ。前部砲臺の方より士官二人、低聲に相語りつゝ艦橋の下を過ぎ



しが、また蔭の暗きに消へぬ。甲板の上寂として、風冷かに、月は  
 いよく牙へつ。  
 艦首に蠢めく番兵の影を見越して、海を望めば、唯左舷に淡き島山  
 ど、見へみ見へずみ月光の中を行く先艦秋津洲をのみ隈にして、一  
 艦の外月に白める黄海の水あるのみ。また一しきり煙に和して勢よ  
 く立上る火花の行末を目送れば、大橋の上高く星を散らせる秋の夜  
 の空は湛へて、月に淡き銀河一道、微茫として白く海より海に流れ  
 入る。

月は三たびかはりぬ。武男が席を厭つて母に酔したりしより、月は  
 三たび移りぬ。  
 此三月の間に、彼が身生は如何に多様の境界を経來りしぞ。韓山の

風雲に胸を躍らし、佐世保の灣頭には「今度此節國の爲、遠く離れ  
 て出て行く」の離歌に腸を断ち、宣戦の大詔に腕を振り、威海衛の  
 砲臺に初めて火の洗禮を授けられ、心を駭かし眼を驚かす可き事は  
 續々起り來りて、殆んど彼をして考ふるの暇なからしめたり。多謝、  
 此が爲めに武男は其心を呑み盡さむとする或ものをば思はずして、  
 纒かに吾を持したるなりき。此國家の大事に際しては、渺たる滄海  
 の一粟、自家川島武男が一身の死活浮沈、奚ぞ問ふに足らむや。彼  
 は斯く自から叱し、彼痛を掩ふて此職分の道に従ひ、絶望の勇をあ  
 げて征戦の事に従へるなり。死を彼は眞に塵よりも軽く思へり。  
 然れど事もなき艦橋の上の夜、韓海の夏暑くして吊床の夢結び難き  
 夜は、どうすれば痛恨潮の如く漲り來りて、丈夫の胸裂けむとせし  
 こと幾回ぞ。時はうつりぬ。今は彼當時、何を耻ぢ、何を憤り、何  
 を悲み、何を恨むとも割ち難き感情の、腸に沸りし時は過ぎて、一



片の痛恨深く痛して、人知らず吾心を蝕ふのみ。母は彼後二たび書  
 を寄せ物を寄せて恙なく歸り来るの日を待つと云ひ送りぬ。武男も  
 流石に老ひたる母の膝下淋しかる可きを思ひては、彼時の過言を謝  
 して、其健康を祈る由書き送りぬ。然れど解きても融け難き一塊の  
 恨は深く胸底に残りて、彼が夜々吊床の上に、北洋艦隊の殲滅  
 と吾討死の夢に伴ふものは、雪白の肩掛を纏へる病める或人の面影  
 なりき。

消息絶へて、月は三たび移りぬ。彼女猶生きてありや、なしや。生  
 きてあらむ、吾が忘るゝ日なきが如く、彼も思はざるの日はなから  
 む。共に生き共に死なむと誓ひしならずや。  
 武男は斯く思ひぬ。更に最後に相見し時を思ひぬ。五日の月松にか  
 かりて、靡々としたる返子の夕、吾を送りて門に立出て、「早く歸つ  
 て頂戴」と呼びし人は何處ぞ。思ひ入りて眺むれば、白き肩掛を纏

へる姿の、今にも月光の中より歩み出で来らむ心地すなり。  
 明日にもあれ、首尾よく敵の艦隊に會して、此身砲彈の的にもなら  
 ば、渾て世は一場の夢と過ぎなむ、と武男は思ひぬ。更に其母を思  
 ひぬ。亡き父を思ひぬ。幾年前江田島にありける時を思ひぬ。而し  
 て心は再び病める人の上に返りて、

「川島君」

肩をたゝかれて、打撃きたる武男は急に月に背きつ。驚かせしは航  
 海長なり。  
 「實に好い月ぢやないか。戦争に行くとは思はれんね」  
 打點頭きて、武男は竊かに涙をふり落しつゝ、雙眼鏡を舉げたり。月  
 白ふして黄海、物の遮ざるなし。



(一)の三

月落ち、夜は紫に曙けて、九月十七日となりぬ。午前六時を過ぐる頃、艦隊は已に海洋島の近くに進みて、先づ砲艦赤城を島の家登灣に遣はして敵の有無を探らしめしが、灣内空しと歸り報じつ。艦隊更に進航を續けて、大、小鹿島を斜に見つゝ大孤山沖にかゝりぬ。午前十時武男は要ありて行きし士官公室を出て、まさに艀口にかゝらむとする時、上甲板に聲ありて

「見へたッ！」

同時に靴音の忙しく走せ違ふを聞きつ。心臓の鼓動と共に、艀梯に踏みかけたる足ははたと止まりぬ。恰も梯下を通りかゝりし一人の水兵も、ふつと立止まりて武男と顔見合はしたり。

「川島分隊長、敵艦が見へましたか」

「應、其様らしし」

云ひ棄て、武男は亂れ拍胸を徒らにおし静めつゝ足早に甲板に上れば、人影走せ違ひ、呼笛鳴り、信號手は忙はしく信號旗を引上げ居り、艦首には水兵多くイみ、艦橋の上には司令長官、艦長、副長、參謀、諸士官、何れも口を結び眼を据へて、遙かに艦外の海を望み居るなり。其視線を趁ふて望めば、北の方黄海の水、天と相合ふ際に當りて、黒き糸筋の如くほのかに立上るもの、一、二、三、四、

五、六、七、八、九條また十條、

是れまさしく敵の艦隊なり。

艦橋の上に立つ一將校袂時計を出し見て「一時間半は大丈夫だ。準備が出来たら、先づ腹でも拵へて置くてすあ」

中央に立ちたる一人は頷き「御待遠様。諸君、まつかり頼みますぞ」と云ひ終りて髯を捻りつ。

順て戦闘旗ゆらくと大櫓の頂高く引揚げられ、數聲の喇叭は、艦



橋より艦内隈なく鳴り渡りぬ。配置に就かむと、艦内は行きかふ人の影織るが如く、橋樓に上る者、機関室に下る者、水雷室に行く者、治療室に入る者、右舷に行き、左舷に行き、艦尾に行き、艦橋に上り、縦横に動ける局部の作用忽ち成るを告げて、戦鬪の準備は時を移さず整ひぬ。恰も午時に近くして、戦はんとして先づ午餐の令を出てたり。

分隊長を助け、部下の砲員を指揮して手早く右舷速射砲の装填を終りたる武男は、やゝ後れて、士官次室に入れば、同僚皆已に集りて、箸下り皿鳴りぬ。短少尉は眞面目になり、甲板士官は頼りに額の汗を拭ひつゝ俯きて食ひ、年少の候補生は折々他の顔を覗きつゝ、劣らじと皿をかへぬ。忽ち箸をかりりと投げて立ちたるは赤禰衣少尉なり。

「諸君、敵を前に控へて悠々と午餐を喫ふ諸君の勇氣は——立花宗茂

に劣らずと云ふ可しだ。御互に皆揃つて今日の夕飯を食ふや否は疑問だ。諸君、別に握手でもしやうぢやないか」

云ふより早く隣席にありし武男が手をば無手と握りて三三度打ふりぬ。同時に一座は總立になりて手を握りつ、握られつ、皿は二個三個からくと卓の下に轉ひ落ちたり。左頬に痣ある一少尉は少軍醫の手をとり、

「吾輩が負傷したら、何卒御手柔かにやつて呉れ玉へ。其賄賂だよ、此は」

と四五度も打ふりぬ。呵々ど笑へる一座は、また忽ち眞面目になりつ。一人去り、二人去りて、果は空しき器皿の狼藉たるを留むるのみ。

零時二十分、武男は、分隊長の命を帯び、副艦長に打合はす可き事ありて、前艦橋に上れば、我艦隊は已に單縦陣を形づくり、約四千



米突を隔て、第一遊撃隊の四艦は真先に進み、本隊の六艦は我松島を先登として之についき、赤城西京丸は本隊の左舷に沿ふて随ふ。仰ぎ見る大橋の上高く戦闘旗は碧空に羽たゝき、煙突の煙眞黒に渦まき上り、船は海を劈いて白波高く兩舷に湧きぬ。將校或は雙眼鏡をあげ、或は長劍の柄を握りて艦橋の風に向ひつゝあり。遙かに北方の海上を望めば、曇きに水天の間に一髪の浮めるが如く見へし煙は、一分一分に肥へ來りて、敵の艦隊宛ながら海中より湧き出づる如く、煙先づ見へ、ついて針大の橋はの見へ、煙突見へ、艦體見へ、橋頭の旗影また點々として見へ來りぬ。一際すくれて眼立ちたる定遠鎮遠相聯んで中軍を固め、經遠致遠廣甲濟遠は左翼、來遠靖遠超勇揚威は右翼を固む。西に當つて更に煙の見ふるは、平遠廣丙鎮東鎮南及六隻の水雷艇なり。敵は單横陣を張り、我艦隊は單縱陣をとつて、敵の中央を指して丁

字形に進みしが、恰も敵陣を距る一萬米突の所に到りて、我先鋒隊は咄嗟に針路を左に轉じて、敵の右翼を指して霧地に進みつ。先鋒の左に轉ずると共に、我艦隊は龍の尾を揮ふる如くゆら／＼と左に動いて、彼我の陣形は丁字一變して八字となり、彼は横に張り、我は斜めに其右翼に向ひて、宛あがら一大兩脚規形をなし、彼進み、我進みて、相距る六千米突に到りぬ。此時敵陣の中央に控へたる定遠艦首の砲臺に白煙むら／＼と渦まき起り、三十珊の兩彈丸空中に鳴りをうつて我先鋒隊の左舷の海に落ちたり。黄海の水驚いて倒に立ちぬ。

(一)の四

黄海！昨夜月を浮べて白く、今日もさり氣なく雲を蒸し、島影を載



せ、睡鷗の夢を浮べて、悠々として書よりも静かなりし黄海は、今  
 修羅場とありぬ。  
 船橋を下りて武男は右舷速射砲臺に行けば、分隊長はまさきに雙眼鏡  
 をあけて敵の方を望み、部下の砲員は兵曹以下概ね短表衣を脱ぎ棄  
 て、腰而上は臂迄の襦袢を纏ひて潮風に黒める筋太の腕を露はし、  
 白木綿もてしつかと腹部を巻けるもあり。黙して號令を待ち構へつ。  
 此時我先鋒隊は敵の右翼を亂射しつゝ、已に敵前を過ぎ終らむとし、  
 我本隊の第一に進める松島は全速力を以て敵に近づきつゝあり。雙  
 眼鏡をとつて彼方を望めば、敵の中央を堅めし定遠鎮遠は真先に抽  
 んで、横陣や、鈍角をなし、距離漸く縮まりて二艦の形状は遠自  
 にも次第に鮮やかになり來りぬ。卒然として往年彼二艦を横濱の埠  
 頭に見しことを思ひ出でたる武男は、倍の好奇心もて打見やりつ。  
 依然當時の二艦なり。但、今は黒煙を噴き、白波を蹴り、砲門を開

きて、咄々來つて我に迫らんとする状の、宛ながら悪獸なんどの來  
 り向ふ如く、恐るゝにはあらで一種已み難き嫌厭と憎惡の胸中に  
 漲り出づるを覺へしなり。  
 忽ち海上遙かに一聲の雷轟き、物ありクーンと空中に鳴をうつて、  
 松島の大櫓を掠めつゝ、海に落ちて、二丈ばかり水を蹴上げぬ。武  
 男は後頂より脊髄を通じて言ふべからざる冷氣の走るを覺へしが、  
 忽ち足を踏み固めぬ。他は如何に見れば、他尾に群がりし砲員の  
 列一たびは揺ぎて、また動かさず。艦はいよゝゝ進むで、三個四五個  
 の敵弾つゞけさまに亂れ飛び、一は左舷に吊りし端艇を打碎き、他  
 は渾て松島の四邊に水柱を蹴立てつ。  
 「分隊長、未だですか」堪へ兼ねたる武男は叫びぬ。時まさに一時を過  
 ぎむとす。「四千米突」の語は、遍ねく右舷及艦の首尾に傳はりて、  
 照尺整ひ、牽索握られつ。待ち構へたる一聲の喇叭鳴りぬ。「打て」



「の號令と共に、我三十二珊巨砲を初め、右舷側砲一齊に第一彈を敵艦に送らしつ。艦は震ひ、舷に傍ふて煙影しく渦まき起りぬ。恰も其答禮として、定遠鎮遠の何れか放ちたる大彈丸凄まじく空に唸りて、煙突の上二寸ばかり掠めて海に落ちたり。砲員の二三は思はず頭を下げぬ。

分隊長顧みて「誰だ、誰だ、御辭儀をするのは？」  
武男を初め候補生も砲員もどつと笑ひつ。

「さあ、打てッー」まつかり、まつかり——打てッー」  
右舷側砲は連放にうち出しぬ。三十二珊巨砲も艦を震はして鳴りぬ。後續の諸艦も一齊にうち出しぬ。忽ち敵のうちたる時限彈の一箇は、砲臺近く破裂して、今しも彈丸を砲尾に運びし砲員の一人武男が後に撞と倒れつ。起き上らむとして、また倒れ、血はさつと進りてまたゝかに武男がズボンにかゝりぬ。砲員の過半は其方を顧みつ。

「誰だ？誰だ？」  
「西山ぢやないか。西山だ、西山だ」

「死んだか」

「打てッー」分隊長の聲鳴りて、砲員皆砲に群がりつ。

武男は手早く運搬手に死者を運ばし、ふりかへつて其位置に立たんとすれば、分隊長は武男がズボンに眼をつけ

「川島君、負傷ぢやないか」

「何有、今の餘瀝です」

「あゝ左様か。さあ、今の仇を討つてやれ」

砲は間断なく發射し、艦は全速力をもて駛る。我本隊は敵の横陣に對して大なる弧を書きつゝ、且つ射且つ駛せ、一時三十分過ぎには已に敵を半周して其右翼を廻り、まさに敵の背後に出でむとす。第一回の戦終りて、第二回の戦此れより始まらんとすなり。松島の



右舷砲暫時鳴を静めて、諸士官砲員淋漓たる汗を拭ひぬ。  
 此時彼我の陣形を見れば、我先鋒隊は逸早く敵の右翼を亂射して、  
 超勇揚威を戰鬪力なきまでに憊しつゝ、一回轉じて本隊と敵の背後  
 を撃たむとし、我本隊の中比叡は速力劣れるが爲め本隊に續行する  
 能はずして、大勝にも獨り敵陣の中央を突貫し、死戦して活路を開  
 きしが、火災の故に圏外に去り、西京丸また危険を免れて圏外に去  
 らむとし、敵前に殘されし赤城は六百噸の小艦を以て獨力奮闘重圍  
 を衝いて、比叡のあとを趁はむとす。而して先鋒の四艦と、本隊の  
 五艦とは、整々として列を亂さず。  
 敵の方を望めば、超勇焼け、揚威戰鬪力を失して、敵の右翼亂れ、  
 左翼の三艦は列を亂して我比叡赤城を追はむとし、其援軍水雷艇は  
 隔離して一邊にあり。而して定遠鎮遠以下數艦は、我が其背後に廻  
 らんとするより、急に舳を回らして縱陣に變じつゝ、健氣にも我本

隊に向ひ来る。

第二回の戦は今や始まりぬ。我本隊は西京丸が掲し「赤城比叡危険」  
 の信號を見るより、速力大なる先鋒隊の四艦を遣はして、赤城比叡  
 を尾する敵の三艦を追ひ押はせつゝ、一隊五艦依然單縱陣をとつて、  
 同じく縱陣をとれる敵艦を中心になたる蛇の目を畫きもて且つ駛り  
 且つ環ち、二時已に半ならむとする時、敵艦隊を一周し終つて敵の  
 此方に達しつ。此時我先鋒隊は比叡赤城を尾する敵の三艦を一戦に  
 蹴散らし。北ぐるを追ふて敵の本陣に驅り入れつゝ、一括して彼側  
 より攻撃にかゝりぬ。されば我本隊先鋒隊は恰も敵の艦隊を中央に  
 取籠めて、左右より挟み撃たんとすなり。  
 第三次の激戦今始まりぬ。我海軍の精銳と、敵の海軍の主力と、共  
 に集まりたる彼我の艦隊は、大余速力もて駛せ違ひ入り亂れつゝ相  
 闘ふ。恰も二龍の長鯨を捲くが如く黄海の水沸て一面の泡となりぬ。



(一)の五

我本隊は右、先鋒隊は左、敵の艦隊を真中に取圍めて、引包むて撃たむとす。戦は今酣になりぬ。戦の熱するに従つて、武男はいよいよ吾を忘れつ。其昔學校にありて、ベースボールに熱中せし時、勝敗のこゝ暫らくの間に決せむとする大事の時に際する毎に、身の誰たり場所の何處たるを忘れ、殆んど物ありて空より吾を引き廻はす様に覺へしが、今や恰も其時に異ならざるの感を覺へぬ。艦隊敵と離れてまた敵に向ひ行く間と、艦體一轉して左舷敵に向ひ右舷暫らく閑なる間とを除く外は、間斷なき號令に聲囁れ、汗は淋漓として満面に滴るも、更に覺へず。旗艦を目ざす敵の彈丸偏へに松島に接がり、鐵板上に裂け、木板焦れ、血は甲板に塗るも、更に覺へず。敵味方の砲聲は恰も心臓の鼓動に時を合はしつゝ、やゝ間あれば耳邊の寂しきを怪むまで、身は全く血戰の熱に浮かされつ。されば、

部下の砲員も亂れ飛ぶ敵彈を物ともせず、裝填し照準を定め牽索を張り發射しました裝填するまで、射的場の精確更に實戰の熱を加へて、火災は起らむとするに消し、彈は命ぜざるに運び、死亡負傷は忽ち運び去り、殆んど士官の命を待つまでもなく、手自づから動き、足自づから働きて、戰闘機關は間斷なく滑らかに運轉せるなり。此時眼を舉ぐれば、灰色の煙空を蔽ひ海を覆ふて十重二十重に渦まける間より、思ひ掛なき敵味方の檣と軍艦旗は彼方此方に仄見へ、殆んど秒毎に轟然たる響は海を震はして、彈は彈と空中に相うつて爆發し、海は間斷なく水柱を駈上げて表へかへらむとす。「愉快！定遠が焼けるぞ！」囁れたる聲ふり絞りて分隊長は叫びぬ。煙の絶間より望めば、黃龍旗を翻へせる敵の旗艦の前部は黃煙渦まき起りて、蟻の如く敵兵の蠢めき騒々を見る。武男を初め砲員一齊に快を叫びぬ。



「さあ、遣れ。遣つつけろッ！」  
勢込むで、砲は一時に打ち出しぬ。

左右より夾撃せられて、敵の艦隊は崩れ立たり。超勇は已に真先に火を帯びて沈み、揚威はとく己に大破して逃れ、致遠また没せんとし、定遠火起り、來遠また火災に苦む。堪へ兼し敵艦隊は終に定遠鎮遠を殲して、盡く支離に逃げ出しぬ。我先鋒隊はすかさず其後を追ひぬ。本隊五艦は残れる定遠鎮遠を撃たむとす。第四回の戦始まりぬ。

時まさに三時、定遠の前部は火いよく燃へて、黄煙夥しく立上れど、猶逃れず。鎮遠またよく旗艦を護して、二大鐵艦巍然山の如く我に向ひつ。我本隊の五艦は今や全速力を以て敵の周圍を駛せつ、幾回か盤りては亂射し、旋りては亂射す。砲弾は雨の如く二艦に注ぎぬ。然も輕裝快馬のサラセン武士が馬を盤らして重鎧の十字軍士

を射るが如く、命中する彈丸多くは二艦の重鎧に刎ねかへされて、艦外に破裂し終りつ。午後三時二十五分我旗艦松島は恰も敵の旗艦と相並びぬ。我うち出す速射砲彈のまさしく彼が艦腹に中りて、刎ねかへりて花火の如く空しく艦外に破裂するを望みたる武男は憤に堪へ得ず、齒を切りて、右の手もて劍の柄を破れよと打たしき、  
「分隊長、無念です。彼……彼を御覽なさい。音生ッ！」  
分隊長は血眼にありて甲板を踏み鳴らし「うてッ！甲板をうて、甲板を！何有！うてッ！」

「うてッ！」武男も聲ぶり絞りぬ。  
齒を切りたる砲員は憤然として勢猛く連放に打出しぬ、  
「今一ッ！」

武男が叫びし聲と同時に、霹靂滿艦を震動して、砲臺内に噴火山の破裂するよと思ふ其時よそく、雨の如く飛び散る物にうたれて、武



男は撞と倒れぬ。

敵艦の發ち出したる三十珊の大榴彈二個、恰も砲臺の真中を貫いて破裂せしなり。

「残念ッ！」

叫びつゝ、刎ね起きたる武男は、また尻居に撞と倒れぬ。

彼は今體の下半に夥しき苦痛を覺へつ。倒れながらに見れば、四邊は一面の血、火、肉のみ。分隊長は見へず。砲臺は洞の如くなりて、

其間より青きもの揺めきたり。此は海なりき。

苦痛と、云ふ可からざる慘しき臭の爲めに、武男が眼は閉ぢぬ。人の呻吟く聲。物の燃ゆる音。ついて「火災！火災！ポンプ用意ッ！」

と叫ぶ聲。同時に走せ來る足音。

忽ち武男は手ありて吾を搔ぐるを覺へつ。手の脚部に觸るゝと共に、限りなき苦痛は腦頂に響いて、思はず「呀」と叫びつゝ、仰反り――

紅の霞閉せる眼の前に渦まきて、次第に吾を失ひぬ。

*Love*



(二)の一

大本營所在地廣島に於ては、十月中旬、第一師團は夙く已に金州半島に向ひたれど、其後に第二師團の健兒廣島狹しと入り込み來り、加之臨時議會開かれむとして、六百の代議士續々東より來つれば、高朝腕車は到る處劍佩馬蹄の響と入り亂れて、維新當年の京都の賑合を再び此處山陽に見る心地せられぬ。

市の目貫と云ふ大手町通は「參謀總長宮殿下」「伊藤内閣總理大臣」「川上陸軍中將」などと嚴めしき宿札うちたるあたりより、二丁目三丁目と下りては戸毎に「徵發ニ應ズ可キ坪數〇〇疊、〇間」と貼札して、大方の家には士官下士の姓名兵の隊號人數を記せし紙札を張りたるは、假兵舎にも置きあまりたる兵士の流れ込みたるなり。其間には「〇〇酒保事務所」「〇〇組人夫事務取扱所」など看板新しく人影の忙しく出入するあれば、其處の店先にては忙しくラム子瓶を

大箱に詰め込み、此方の店はビスケットの箱山の如く荷造に汗を流す若者あり。其間を縫ふて馬上の將官が大本營の方に急ぎ行きしむとより、電信局にかけつくるにか鉛筆を耳に挿みし新聞記者の車を飛ばして過ぐるやがて、爵金木綿に包みし長刀と革囊を載せて停車場の方より來る者、面黒々と日にやけてまだ夏服の破れたるまゝ、宇品より今上陸して來つと覺しき者と行き違ひ、新聞の寫眞附録にて見覺ある元老の何か思案顔に車を走らす此方には、近きに出發す可き人夫が鼻歌歌ふて往來をぶらつけば、彼方の家の椽前に劍を磨きつゝ、健兒が歌ふ北音の軍歌は、川向ふの嬌めかしき廣島節に和して響きぬ。

「陸軍御用達」と一間あまりの大看板、其他看板二三枚、入口の三方にかけ列ねたる家の玄關先より往來にかけて粗製毛布防寒服やうのもの山と積みつゝ、番頭らしきが若者五六人を指圖して荷造に忙し



き所に、客を送りて驟卒と奥より出て來し五十あまりの翁、額や、  
 禿げて眼尻垂れ左眼の下にした、かな赤黒子あるが、何か番頭に  
 附け終りて、入らむとしつゝ忽ち門外を上手に過ぎ行く車を目  
 「田崎君……田崎君」  
 呼ぶ聲の耳に入らざりしか、其まゝに過ぎ行くを、若者して呼ば  
 さすれば、車は門に歸りぬ。車上の客は五十あまり、色赤黒く、  
 髯少しは白きも雜り、黒絨の羽織に新しからぬ同色の中山帽を  
 踏込に中形の鞆を載せたり。呼ば戻されて怪訝の顔は、玄關に立  
 し主人を見るより驚にかけりて、帽を脱ぎつゝ、  
 「山木さんぢやないか」  
 「田崎君、珍らしいね。抑何時來たんです？」  
 「此涼車で歸京る心算で」と田崎は車を下り、庭細など取り散らし  
 たる間を縫ひて玄關に寄りぬ。

「歸京？何處に何時御出なの？」  
 「はあ、つい先日佐世保に行つて、今歸途です」  
 「佐世保、武男さん——旦那の御見舞？」  
 「はあ、旦那の見舞に」  
 「此はひとひ。旦那の見舞に行きながら、往返とも素通は實にひどい  
 娘も娘、御隠居も御隠居だ、葉書一枚も來ないものだから」  
 「何、急ぎましたからね」  
 「だつて、行がけに一寸寄つて下さりや宜かつたに。兎に角先御上な  
 さい。車は返して。宜さ、御話もあるから。一氣車後れたつて宜だ  
 らうぢやないか。——所て武男さん——旦那の負傷は如何でした？實  
 は私も彼時御負傷の事を聞いたので、一寸御見舞に行かなけりやな  
 らんくと思つてたんだが、思つたばかりで、丁度第一師團が近  
 々に出發ると云ふので、滅法忙しかつたもんですから、つい其の何



で、御見舞状だけあけて置いたンでしたが。——あゝ左様でしたか、別に骨にも障らなかつたですね、大腿部——はあ左様ですか。兎に角若い者は結構ですな。御互に年寄は一寸指尖に刺が立つても、一週間や二週間はかゝるが、旦那なんぞ御年が若いものだから——兎に角結構御目出度事でした。御隠居も御安心ですね」  
 中腰に帯へし田崎は時計を出し見つ。座を立たんとするを、山木は引どめ

「先宜さ。幸の便で、少し御隠居に差上たいものもあるから。夜涼車になさい。夜涼車だともまだ大分時間がある。一寸用を済まして、何處ぞへ行つて、一盃やりながら話すときませう。廣島の魚は實に旨いですぜ」  
 口は肴よりも猶旨かる可し。

(二)の二

秋の夕日天安川に流れて、川に臨める某亭の障子を金色に染めぬ。二階は貴衆兩院議員の有志が懇親會とやら抜ける程の騒ぎに引易へて、下の小座敷は婢も寄せず唯二人話しても盃をあぐるは山木と彼田崎と呼ばれたる男なり。  
 此田崎は、武男が父の代より執事の役を務めて、今も程近き吾家より日々川島家に通ひては、何くれと忠實に世話をなすつ。如才なく切つて廻はす力量なきかはりに、主家の収入を懐みて吾懐を肥す氣遣なきが此男の取柄、と武男が父は常に云ひぬ。されば川島未亡人にも武男にも淺からぬ信任を受けて、今度も未亡人の命によりて遙々佐世保に主人の負傷をば見舞ひしなり。  
 山木は持たる盃を下に置き、額の邊を撫でながら「實は何ですて、私も歸京はしても一日泊りて直ぐとまた廣島に引返へすと云ふ様な



譯で、其様な事も耳に入らなかつたですか。其れでは何ですれ、彼後浪子さんも餘程わるかつたのですね。成程如何も些慘刻かつたね、併し兎も角も川島家の爲だから仕方が無いと云つた様なもので、はあ左様ですか、近頃はまた少しは宜い方で、成程、逗子に保養に行つて居なさるかね。併し彼病氣ばかりは如何程よく見へても畢竟死病だて。所て武男——否若旦那はまた怒つて居なさるかね。椀の蓋をとれば松茸の香の立上りて鯛の脂の珠と浮めるを旨げに吸ひつゝ、田崎は髻押拭ひて

「さあ、其處ですがな。其はもう原を云へば何も御家の爲で詮方もない」と云つたものゝ、喃山木君旦那の留守に何も相談なしにやつて御仕舞なさると云ふは、御隠居も少し御氣隨が過ぎたと云ふものてな。實は拙者も旦那の御歸まで御待ちなさる様にと申上げて見たのぢやが、彼御氣質で、一旦斯様と云ひ出しなすつた事は否應なしにやり

遂る御方だから、到頭彼通りになつたので、此れは旦那が面白く思ひささらぬも尤ぢやと拙者は思ふ位。其に困つた人は彼千々岩さん——たしか最早清國に渡つた様に聞いたですが」

山木はぢろりと彼方の顔を見つゝ、「千々岩！はあ彼男は先日出征たが、愁顔を知られた報で、此處に滞在中も折々無心に遣つて来て困つたですよ。顔の皮の厚い男でね、戦争で死ぬかも知れんから香奩と思つて餞別を呉れる、其代り生命があつたら屹度金鵝勳章をどつて来るなんか云つて、百兩ばかり踏んだくつて行つたてすて。はは、、、所て武男君は負傷が快なつたら、一先歸京なさるかね」

「さあ、御自身は決意次第すくまた戦地に出かける積で居なさる様ですかね」

「相變らず元氣な事を言ひなさる。が、田崎君、一度は歸京つて御隠居と仲直りをなさらんと不可ぢやあるまいか。如何程氣に入つて居







(二)の三

田崎は含笑みぬ、川島未亡人は眉を蹙めしなり。  
武男が憤然席を蹴立て、去りし彼日、母は其子の後影を睨みつゝ、叫

びぬ  
「不孝者奴が！如何でも勝手にすツが宜え」  
母は武男が常によく孝にして、吾意を迎ふるに踟躕せざるを知りぬ。  
知れるが故に、其浪子に對するの愛固より淺きにあらざるを知りつゝ  
も、其兩立する能はざる場合には、一も二もなく彼愛を棄て、此  
孝を取るならんと思へり。思へるが故に、其仕打の吾ながら寧ろ果  
斷に過ぐるを思はざるにあらざりしも、猶家の爲武男の爲と謂ひつ  
ゝ、獨斷をもて浪子を離別せるなり。武男が憤の意外に烈しかりし  
を見るに及むて、母は初めて吾違算を悟り、同時に所謂母なるもの  
を決して絶對的權力を其子の上に有するものにあらざるを知りぬ。

疊きには其子の愛の浪子に注ぐを一種不快の眼をもて見たりしが、  
今は母の愛母の威光母の恩を以てして猶死に瀕したる一浪子の愛に  
勝つ能はざるを見るに及び、吾威權全く墜ちたる様に、其子をば全  
く浪子に奪ひ去られし様に感じて、且は武男を怒り、且は實家に歸  
り去れる後までも猶浪子を罵れるなり。

猶一つ其怒を激せしものありき。其は臆げながら方寸の那邊にか己  
が仕打の非なるを、知るとにはあらざれど、聊か其疑のほのかに棚  
引けるなり。武男が憤の底には些の道理なかりしか、吾仕打には些  
の吾が領分を越へて其子を侵せし所はなかりしか、眠られぬ夜半に  
獨り奥の間の天井にうつる行燈の影眺めつゝ考ふるとはなく思へば、  
何處にか汝の誤なり汝の罪なりと嗚やく聲ある様に思はれて、更に  
其胸の亂るゝを覺へぬ。世にも強きは自からは是なりと信ずる心なり。  
腹立たしきは、或は人より或は吾夷なる或ものより吾非を示されて、



吾れと吾が良心の前に悔悟の膝を折る時なり。矢所を刺せば、猛獸は叫ぶ。吾非を知れば、人は怒る。武男が母は、此が爲めに抑へ難き怒は猶更に悶を加へて、いよく武男の怒る可く、浪子の悪む可きを覺へしなり。武男は席を蹴つて去りぬ。一日又一日、彼は來りて罪を謝するあく、詫の書だも送り來らず。母は胸中の悶々を漏らす可き唯一の道として、其怒を恣にして、緩かに自から慰めつ。武男に怒り、浪子に怒り、彼時を思ひ出て、怒り、將來を想ふて怒り、悲しきに怒り、淋しきに怒り、詮方なきにまた怒り、怒り怒りて怒りの疲勞に漸く夜も睡るを得にき。

川島家にては平常にも恐ろしき隠居が疝癪の近頃はまたひた燃へて、慣れし婢等も幾度か手荷物仕舞ひかけ、る間に、朝鮮事起りて豊島牙山の號外は飛びぬ。戦争に行くに告別の手紙の一通も遣らぬ不埒な奴と母は幾度か怒りしが、世間の様子を聞けば、田舎

より其子の遠征を見送らんと出て來る老婆、物を贈り書を送りて其子を勵ます母もありと云ふに、子は親に怒り親は子を憤りて一通の書だに取りかはさず、彼は戦地に吾は帝都に、あのく心に不快の塊を懐いて、若し此まゝに永別となるあらば、を思ふとはなく、ほのかに感じたる武男が母は、終に罵り々々我を折りて引つゞき三通の書を戦地にある其子に遣りぬ。

折りかへして戦地より武男が返書は來れり。返書來りてより一ト月あまりにして、一通の電報は佐世保の海軍病院より武男が負傷を報じ來しぬ。流石に母が電報をとりし手は顫々と打震びつ。程なく其負傷は命に關する程にもあらざる由を聞きたれど、猶田崎を遠く佐世保に遣りて其容子を見させしなりき。



(二)の四

田崎が佐世保より歸りて、仔細に武男の容子を報せるより、母はやや安堵の胸を撫でけるが、猶此上は全快を待ちて一應顔をも見、また戦争済みたらば武男が爲めに早く後妻を迎ふるの得策なるを思ひぬ。斯くして一には浪子を武男の念頭より絶ち、一には川島家の祀を存し、一にはまた心の奥の奥に於て、爰きに武男に對せる所行のやゝ暴に過ぎたりし其罪を亡をなさむと思へるなり。

武男に後妻を早く迎へむとは、浪子を離別に決せし其日より早く己に母の胸中に湧き出てし問題なりき。其が爲めに數多からぬ知己親類の嫁し得可き嬢子を心の中に彼此と練り見しが、思はしきものもなく、思ひ迷る折りから、山木は突然娘を豊を行儀見習と稱して川島家に入れ込みぬ。武男が母とて白痴にもあらざれば、山木が底意は必ずしも知らざるにあらず。ち豊が必ずしも智徳兼備の賢婦人

ならざるをも知らざるにはあざざりき。然れど溺るゝ者は藁をも摠む。武男が妻定めに窮したる母は、山木が望を幸ひ、試にお豊を預かれるなり。

試験の結果は、田崎が含笑めるが如し。試験者も受験者も共に満足せずして、云は、婢等が散の種となるに終れるなり。

初めは平和、次ぎは小口徑の獵銃を用ゐて輕々に散彈を撒き、終に攻城砲の恐ろしきを打出す。此は川島未亡人が何人に對しても用ふる所の法あり。浪子も曾て其經驗を嘗めぬ。而して其神經の敏に感の鋭かりし程其苦痛を感ずる事も早かりき。ち豊も今其經驗を強られぬ。而して其の無爲にして化する底の性質は、散彈の飛ぶも殆んど何處の家に煎る豆ぞと思ひ貌に過ぐるより、彼攻城砲は例よりも速やかに持出されざるを得ざりしなり。

其心悠々として常に春霞の棚引ける如く、胸中に一點の物無ふして



人我の別定かならぬのみか、往々にして個人の輪廓消へて直ちに動植物と同化せむとし、春の夕に庭などに立ちたれば靈も體も其まゝ霞の中に融け去りて掬ふも手にはたまたざる可きお豊も戀に自己を自覺し初めてより、俄かに苦勞と云ふものも解し初めぬ。眠むき眼摩りて起き出るより、彼此と追ひ使はれ、其果は小言大喝。尤も陰口中傷は概して解かれぬまゝに鵜呑となれど、連放つ攻城砲のみは如何に超然たるお豊も當りかねて、戀しき人の家ならずは夙にも逃げ出しつべく思へるなり。然りながら父の戒、折々櫻川町の宅に歸りて聞く母の訓は此處と、健氣にも猶攻城砲の前に陣取りて、日又日を忍びて過ぎぬ。時には耐り兼ねて思ひぬ、戀は斯くも辛きものよ、最早二度とは人を戀はじと。憐れむ可きお豊は、川島未亡人の爲めには其亂れ勝なる胸の安全管にせられ、家内の婢僕には日永の慰にせられ、戀しき人の顔を見ることも無ふして、生れ出でしより

例無き克己と辛抱を以て當もなきものを待ちけるなり。お豊が來りしより、武男が母は新一の懊惱をば添へぬ。失へる玉は大にして、去れる婦は賢なり。比較になる可き人ならぬ共、お豊が來りて身近に使はるゝに及びて、爲る事毎に氣に入るはなくて、武男が母は堅く其心を塞げるに拘はらず、ともすれば昔吾が叱りし罵りもせし其人を思ひ出でぬ。光を靦める女の、言葉數多からず起居に静淑なれば、見たる所は眼より鼻にぬける程華手には見へぬど、不馴ながらもよく此方の氣を飲み込みて、機轉も利き第一心がけの殊勝なるを、圖に乗つては口汚く罵りながら、心の底には彼年頃でよく氣がつくと暗に白状せしこともありしが、今眼の前に同じ年頃のお豊を置きて見れば、是非なく比較はどれて、事毎に思ふまじと思ふ人を思へるあり。されば日々氣に適はぬ事の出で來る毎に、春霞の化けて出でたる人間の名をお豊と呼ばれて眼は細々と口も閉



ぢあへず座れる傍には、何時しか色少し蒼ざめて髪黒々と静淑なる若き婦人の俐發らしき眼をあけてつくくど吾顔を眺めつゝ「如何でいますか？」と云ふ様な心地して、武男が母は思はずもわななかれたつ。「ぢやつて、病氣をすつが悪かぢやなつか」と幾回か陳辨すれど、猶妙に胸先に込みあげて来るものを、自己は怒と思ひつゝ、果はまた大盛あげて、お豊に當り散らしぬ。然れば廣島の旗亭に、山木が田崎に打向ひて娘お豊を武男が後妻にと臆げならず云ひ出でし其時は、川島未亡人とお豊の間は去る六月に於ける日清の間よりも危く、彼出すか、吾出るか、危機は所謂一髪にかゝりしなりき。

(三)の1

枕頭近き小鳥の聲に呼び醒されて、武男は眼を開きぬ。床の上より手を伸して、窓帷引き退くれば、今向ふ山を離れし朝日花やかに玻璃窓にさし込みつ。山は朝霧猶白けれど、秋の空は已に蒼々と澄み渡りて、窓前一樹染むるが如く紅なる櫻の梢を鮮やかに覗し出しぬ。梢に兩三羽の小鳥あり、相語りつゝ枝より枝に躍れるが、不圖云ひ合はしたる様に球窓の内を覗き、半身を擡げたる武男と顔見合はし、驚き起つて飛び去りし羽風に、黄なる櫻の一葉はらりと散りぬ。吾を呼び醒ませし朝の使は彼なりけるよと、武男は含笑みつゝ、また枕につかむとして、痛める所あるが如く聊眉を顰めつ。己にして漸く身を床の上に安んじ、眼を閉ぢぬ。朝静にして、耳を擾はす響もなし。鶏鳴き、款乃遠く聞ふ。



武男は眼を開いて笑み、また眼を閉ぢて思ひぬ。

武男が黄海に負傷して。此處佐世保の病院に身を托せしより、已に一月餘過ぎむとす。

彼時、砲臺の真中に破烈せし敵の大榴弾の亂れ飛ぶにうたれて、尻居に撞と倒れつゝ、劇しき苦痛に一時吾を失ひしが、苦痛の甚しかりし割に、脚部の傷は二ヶ所とも幸に骨を避けて、其他は些の火傷を受けたるのみ。分隊長は骸も留めず、同僚は戦死し、部下の砲員無事なるは稀なりしが中に、不思議の命をとりとめて、此の海軍病院に送られつ。最初は流石に熱も劇しく上りて、床の上の謔言に手血氣盛なる若者の、傷も左まで重きにあらず、時候も秋涼に向へる

折柄、熱は次第に下り、経過よく、膿腫の患もなく、已に一月あまり過ぎし今日此頃は、猶幾分の痛をば覺ふれど、ともすれば石炭酸の臭の満ちたる室をぬけ出で、秋晴の庭に下りむとして軍醫の小言を吃ふまでになりつ。此上はたゞ速やかに戦地に歸らむと、只管醫の許容を待てるありき。

垂死心無累、幾蘇意復生。思ひ棄て、塵芥よりも輕かりし命は

不思議に承らへて、熱去り苦痛薄らぎ食欲復すると共に、吾にもあ

らて生を樂む心は動き、從いて煩惱も湧きぬ。蟬は壳を脱げども、

人は己を脱れ得ざれば、戦の熱病の熱に中絶へし記憶の糸は其體の

やゝ癒へて其心の平生に復へると共に、またあのづから掀け起されざ

るを得ざりしなり。

然れど大疾よく體質を新にするに齊しく、僅かに一紙を隔て、死と

相見たるの経験は、武男が記憶を別様に新ならしめたり。激戦、及



び其前後に相ついて起りし異常の事と異常の感は、風雨の如く其心を箠ひ滅かしつ。風雨は已に過ぎたれど、餘波は猶心の海に残りて浮ぶ記憶はちのづから異なる態をとりぬ。武男は母を憤らず、浪子をば今は世になき妻を思ふらむ様に其心の籠に祭りて、浪子を思ふ毎に宛ながら遠き野末の悲歌を聞く如く、一種なつかしき哀を覺へしなり。

田崎來り見舞ひぬ。武男はよりて母の近況を知りまた仄かに浪子の近況を聞きぬ。(武男の氣を損はむことを恐れて、田崎はあへて山木の娘の一條をば云はざりき。)武男は浪子の事を聞いて落涙し、田崎が去りし後も、松風淋しき湘南の別墅に病める人の面影は、黄海の戦どかほるく武男が宵々の夢に入りつ。田崎が東に歸りし後數日にして、何處よりともなく一包の荷物武男が許に届きぬ。

武男は今其事を思へるなり、

(三)の二

武男が思へるは此なり。一週前の事なりき。武男は讀み鑿きし新聞を投げ遣りて、床の上に欠伸じつ、窓外を打眺めぬ。同室の士官昨日退院して、室内には彼一人なりき。時は黄昏に近く、病室はほの闇くして、窓外には秋雨の如く降じきりぬ。隣室の患者に電氣かくるにやあらん、磁々の響絶間なく雨に和して、轉た室内の詫しさを添へつ。聞くともなく其響に耳を假して、眼は窓に向へば、吹きしぶく雨淋漓として



客  
屋  
の  
中

擦あられれど煙ふなるべし。箱の内は何ぞ。紗細を解けば、就中好める泡雪梨の大なるど芭蕉實の鮮けきと溢るゝまでに満ちたり。武男が心臓の鼓動は急になりぬ。

「手紙も何も入つて居ないかね？」

彼をふるひ此を移せど寸の紙だになし。

「一寸其油紙を」

包紙をとりて、吾名を書ける筆の跡を瞥むるより、忽ち胸の塞がるを覺へぬ。武男は其筆を認めたるなり。

彼女なり。彼女なり。彼女ならずして誰かある可き。其縫へる衣の一針毎に、痕は無けれどまさしく澆ける千行の涙を見ずや。其病をつとめて書ける文字の震へるを見ずや。

人の去るを待ち兼ねて、武男は男泣に泣きぬ。

玻璃に滴り、志と濡れたる夕暮の庭は斑らに現はれてまた消えつ。茫然として眺め入りし武男は、忽ち頭より毛布を引被ぎぬ。

五分ばかりたちて、人の入り来る足音して、

「御荷物が届きました。御眠ですか」

頭を出せば、床の横側に立てるは、小使なり。油紙包を抱き、廿文字にからげし重やかなる箱を提げて立ちたり。

荷物？田崎歸りて未だ幾日もなきに、誰が何を送りしぞ。

「あゝ荷物か。何處からだね？」

小使が讀める差出人は、聞きも知らぬ人の名なり。

「一寸開けて貰はうか」

油紙を解けば、新聞、其を解けば紫の包出てぬ。包を解けば出でたり、小絨の單衣、柔らかなき絹物の袷、白縮緬の兵兒帶、雪を欺く足袋、袖廣き褌袴は脱着容易かるべく、真綿の肩蒲團は長き病床に床



素より涸れざる泉は今新に開かれて、武男は限り無き愛の滔々として漲るを覺へつ。晝は思い、夜は彼女を夢みぬ。然れど夢程に世は自由ならず。武男は素より信じて思ひぬ、二人が間は死だも劈く能はじと。況んや區々たる世間の手續をや。然れども其心を實にせむとしては、其區々たる手續儀式が企望と現實の間に越ふ可からざる障壁として立てるを覺へざる能はざりき。世は如何にすとも、彼女は限りなく吾妻なり。然れど母は吾名によつて彼女を離別し、彼女が父は彼女に代つて彼女を引取りぬ。世間の前に二人が間は絶へたるなり。平癒を待つて一たび東に歸り、母に逢ひ、浪子を訪ふて心を語り、再び彼女を迎へむか。如何に目から欺くも、武男は所謂世間の義理體面の上より然る事のみならず可くまたなし得べきを思ひ得ず、事は成らずして畢竟再び母と吾との間を前にも増して乖離せしむるに過ぎざる可きを思ひぬ。母に逆ふの苦は已に嘗めたり。

廣き宇宙に生きて思はぬ程に吾愛をすら縛らるゝを、齒痒しと思へど、武男は脱るゝ路を知らず、遣る方なき懊惱に日又日を送りつ、唯生死ともに吾妻は彼女と思ひて緩かに自から慰め併せて心に浪子をば慰めけるなり。今朝も夢さめて武男が思へる所は、斯なりき。此の朝軍醫が例の如く來り診して、傷のいよ／＼全癒に向ふに満足を表して去し後、一封の書は東京なる母より届きぬ。書中には田崎歸りて聊か安堵せるを書き、且聊か話し度き事もあれば、醫師の許可次第一先づ都合して歸京す可しと書きたり。話し度き事！若くは彼が尤も思ひ且恐るゝ或事にはあらざるか。武男は打案じぬ。武男は終に歸京せざりき。







浪子は去る六月の初、伯母に連れられて歸京し、思ひも掛けぬ宣告を傳へ聞きし其翌日より、病は見るこゝ重り、前後も覺へぬまで胸を絞つて心血の紅なるを吐き、醫は黙し、家族は眉を蹙め、自己は旦夕に死を待ちぬ。命は實に一縷に繋ながれしありき。浪子は喜むて死を待ちぬ。死は却々嬉しかりき。何思ふ間もなく忽ち深井の暗黒に墮ちたる此身は、何の樂あり、何の甲斐ありて、世に永ちへむとはす可き。誰を恨み、誰を戀ふ、左る念は形をなす餘裕もなく、唯身を繞る暗黒の恐ろしく厭はしく、早く此裡を脱れむと思ふのみ。死は實に唯一の活路なりけり。浪子は死を待ち詫びぬ。身は病の床に苦み、心は既に世の外に飛びき。今日にもあれ、明日にもあれ、此身の絆絶へなば、惜からぬ世を下に見て、魂は千萬里の空を天に飛び、懐かしき母の膝に心ゆくばかり泣きもせむ、訴へもせむ、と思へば待たるは實に死の使なりけり。

あはれ、彼女は死をだに心に任せざりき。今日、今日と待ちし今日は、幾度か空しく過ぎて、一月あまり経たれば、吾にもあらで病や、間に、二月を経て更に軽くなりぬ。思ひ棄てし命をまた更に此世に引き返へされて、浪子はまた薄命に泣くべき身となりぬ。浪子は實に惑へるなり。生の愛す可く死の恐る可きを知らざる身にはあらずや。何の爲に醫を迎へ、何の爲に藥を服し、何の爲めに惜からぬ命を繋がむとするぞ。

然れど父の愛あり。朝に夕に彼女が病床を省し、自ら藥餌を與へ、更に自ら指揮して彼女が爲に心靜かに病を養ふ可き離家を建て、如何にもして彼女を生かさずば已まざらんとす。父の足音を聞き、吾病の間なるに欣ぶ慈顔を見る毎に、浪子は恨には墮さぬ涙の自づから頬に滴るを覺へず、漫りに死を希ふに忍びずして、父の爲めに務めて病をば養へるなり。更に一ふり。浪子は良人を疑ふ能はざりき。



海涸れ山崩るゝも固く良人の愛を信じたる彼女は、此回の事一も良人の心にあらざるを知りぬ。病や、間に成りて、仄かに武男の消息を聞くに及びて、愈其信に印捺されたる心地して、彼女は聊慰められつ。固より此後の如何に成り行く可きを知らず、假令此疾瘥ゆとも一たび絶へし縁は再び繋ぐ時なかる可きを感じざるにあらざるも、猶二人が心は冥々の間に通いて、此愛をば何人も劈く能はじと心に謂いて、窃かに自ら慰めけるなり。

されば父の愛と、此仄かなる望とは、手を盡したる名醫の治療と相待ちて、消へむとしたる彼女が玉の緒を一たび繋ぎ留め、九月初旬より浪子は幾と看護婦を伴ふて再び返子の別墅に病を養へるなりき。

(四)の二

返子に来てよりは、病や、快よく、四邊の静かなるに、心も少しは静まりぬ。海の音遠き午後、湯上の體を安樂椅子に倚せて、鳥の音の清きを聞きつゝ、恍然としておれば、宛ながら去にし春の頃此處にありける時の心地して、今にも良人の横須賀より來り訪はむ思ひ母らるゝなりけり。

別墅の生活は、去る四五月の頃に異ならず。幾と看護婦を相手に、日課は服薬運動の時間を違へず、體温を檢し、定められたる攝生法を守る外は、せめての心遣りに歌詠み秋草を活けなどして過せるなり。週に一二回、醫は東京より來り見舞ひぬ。月に兩三回、或は伯母、或は千鶴子、稀に繼母も來り見舞ひぬ。其幼なき弟妹二人は病める姉を懐かしがりて、しばしば母に請へど、病を忌み、且は二人の浪子になづくを面白からず思へる母は、たい叱りて止みぬ。今の身の上を聞き知りてか、昔の學友の手紙を送れるも少なからぬと、



大方は文字麗はしくして心を慰む可きものは却て稀なる心地して、よくも見ざりき。唯千鶴子の来るをば待ち詫びつ。聞きたしと思ふ消息は重に千鶴子より傳はれるなり。縁絶へしより、川島家は次第に遠くなりつ。幾百里西なる人の面影は日夕心に往來するに引易へて、浪子は更に其人の母をば思はざりき。思はずとにはあらで、思はじと務めしなりけり。心一たび其姑の上にあふ毎に、吾ながら恐ろしく苦き一念の抑えれどむら／＼と心に湧き來りて、氣の怪しく亂れむとするを、浪子はふりはらひふりはらひて、心を他に轉せしなり。山木の女の川島家に入り込みしと聞ける其時は、流石に心地亂れぬ。然も其は吾思ふ人の與り知る所ならざる可きを思ひて、強て心を其方に塞げるなり。彼女が身は湘南に病に臥して、心は絶へず西に向ひぬ。其の世に於て最も愛すなる二人は、現に征清の役に從へるならざや。

父中將は浪子が返子に來りしより間もなく、大元帥濠下に扈從して廣島に赴むき、更に遠く遼東に向はむとす。せめて新橋までと思へるを、父は制して、呉々も自愛し、凱旋の日には全快して迎へに來よと云い送りぬ。武男は彼後直ちに戦地に向ひて、現に聯合艦隊の旗艦にありと聞く。秋雨秋風身に恙なく、戦鬪の務に服せらるるや、如何に。日々夜々陸に海に心は馳せて、世には要なしと謂へる浪子も躍る心に新聞をば讀みて、皇軍連勝、吾父息災、武男の武運長久を祈らぬ日はあらざりしなり。九月末に到り、黄海の捷報は聞へ、更に數日を経て負傷者の中に浪子は武男の姓名を見出しぬ。浪子は一夜眠らざりき。幸に東京なる伯母の其心を酌めるありて、何處より聞き得て報せしか、浪子は武男の負傷の太甚しく重からずして現に佐世保の病院にある由を知りつ。生死の憂は慰められしる、諸彼方を思ひ遣りては斯くも爲たし



と思ふ事の多きにつけても、今の身の上の思ふに任せぬ恨はまたむら／＼と胸を塞ぎぬ。愁に夫妻の名義絶へしばかりに、まさしく心は通いつゝ、彼は西に傷つき、吾は東に病みて、行きて問ふ可くもあらぬのみか、明らさまには葉書一枚の見舞すら心に任せぬ身ならずや。斯く思ひては遣る方なく悶へしが、猶已み難き心より思ひつきて、浪子は病の間々に幾を相手に其人の衣を縫ひ、其好める品をも取り揃へつゝ、裂けむとすなる胸の思の萬分一も通へかすと、名をは匿して、遙かに佐世保に送りしなり。

過ぎり過ぎりて、十一月中旬、佐世保の消印ある一通の書は浪子の手部落ちたり。浪子は其書を袴と握りて泣きぬ。

(四)の三

打連れて土曜の夕より見舞に來し千鶴子と妹駒子は、今朝歸り去りつ。暫し賑やかなりし家の内来た常の淋きに復へりて、曇り勝ある障子の内、浪子は獨り床にかけたる亡母の寫真に對いて座しぬ。

今日、十一月十九日は亡母の命日なり。憚る人もなければ、浪子は手匣より母の寫真取り出して、床にかけ、千鶴子が持て來し白菊のやゝ狂はむとするを其前に手向け、午後には茶など點れて、幾の昔語に耳傾けしが、今は幾も看護婦も罷りて、浪子は獨り寫真の前に殘れるなり。

母に別れて已に十年にあまかぬ。十年の間、浪子は亡母を忘るゝの日無かりな。然れど今日此頃は懐しさの堪へ難きまで募りて、事毎に其母を思へり。戀しと思ふ父は今遠く遼東にあり。繼母は近く東京にあれど、中垣の隔昔のまゝに、ともすれば聞きづらきことも耳に入る。亡母の、若し亡き母の無事に永らへて居玉は、彼苦みも



告げ、此悲さも訴へて、かよわき此身に負ひあまる重荷も些は軽く思ふ可きに、何故見棄て、逝き玉ひしと思ふ下より涙は湧きて、寫眞は霧を隔てし様に朦朧になりぬ。

昨日の様あれど、指を折れば十年経ちたり。母上の亡なり玉ふ其年の春なりき、自身は八歳、妹は五歳（其頃は片言雜りの、今は彼通り大きくなりけるよ）櫻模様の曙染、二人揃ふて美しと父上に譽められて嬉しく、吾は右妹は左母上を中に、馬車を軋らして、九段の鈴木に振らし、中の一枚は此處にかけたる此寫眞ならずや。思へば十年は夢と過ぎて、母上は此寫眞になり玉ひ、吾身は――

吾身の上は思はじと定めながらも、味氣なき今の境涯は生憎に歴々と眼の前に現はれつ。思へば思ふ程何の樂も何の望もなき身は十重二十重黒雲に包まれて、此八疊の間は日影も漏れぬ死囚牢になりかはりたる心地すなり。

忽ち柱時計は家内に響き渡りて午後二點をうちぬ。愕かされし浪子は道るゝ如く次の間に立てば、此處には人もあくて、裏の方に幾と看護婦と語る聲す。聞ともなく耳傾けし浪子は、また此室を出で、庭に下り立ち、枝折戸あけて濱に出でぬ。

空は曇りぬ。秋ながらうつとりと雲立ち迷ひ、海は眞黒に響みたり。大氣は恐ろしく静まりて、一陣の風なく、一波だに動かず、見渡す限り海に帆影絶へつ。

浪子は次第に濱を歩み行きぬ。今日は網曳する者もなく、運動する客の影も見へず。孩を負へる十歳あまりの女の子の歌ひあがら貝拾へるが、浪子を見て含笑みつゝ頭を下げぬ。浪子は慘として笑みつ。

また恍然と思ひつゝけて、俯きて歩みぬ。

忽ち浪子は立どまりぬ。濱盡き、岩起れるなり。岩に一條の路あり、其を辿れば瀧の不動に到る可し。此春浪子が良人に導かれて行きし



浪子は其路をとりて進みぬ。

(四)の四

不動祠の下まで行きて、浪子は岩を拂ふて座しぬ。此春良人と共に座したるも此岩なりき。其時は春晴うらくと、淺碧の空に雲なく、海は鏡よりも光りき。今は秋陰暗として、空に異形の雲満ち、海は吾座す岩の下まで満々と溢へて、其凄きまで黯き面を點破する一帆の影だに見へず。浪子は懐より一通の書を取り出しぬ。書中は唯兩三行、武骨なる筆跡の、然も千萬語にまさりて浪子を思は堪へざらしめつ。「浪さんをお思はざるの日は一日も無之候」。此一句を讀む毎に、浪子は今更に胸

迫りて、戀しさの切らるゝばかり身に染みて覺ふるなりき。如何なれば斯く狂れる世ぞ。身は良人を戀ひ戀ひて病よりも思に死なむとし、良人は斯くも想ひて居玉ふを、如何なれば夫妻の縁は絶えけるぞ。良人の心は血よりも紅に注がれて此書中にあるならずや。現に此春此岩の上に、二人並びで、萬世までも誓ひしならずや。海も知れり。岩も記す可し。然るを如何なれば世は遣まゝに二人が間を裂きたるぞ。戀しき良人、懐かしき良人、此春此岩の上に、岩の上――

浪子は眼を開きぬ。身は獨り岩の上に座せり。海は黙々として前に堪へ、後には瀧の音仄かに聞ふるのみ。浪子は顔打掩ひつゝ咽びぬ。細々と瘦せたる指を漏りて、涙ははらくと岩に墮ちたり。胸は亂れ、頭は次第に熱して、縦横に飛びかふ思は梭の如く過去を一目に織り出しつ。浪子は今年の春良人に扶け引かれて此岩に來り



し時を思ひ、發病の時を思ひ、伊香保に遊べる時を思ひ、結婚の夕  
 を思ひぬ。伯母に連れられて歸京せし時、昔し昔し其母に別れし時、  
 母の顔、父の顔、繼母、妹、を初めさまざまの顔は電光の如く其心  
 の眼の前を過ぎつ。浪子は更に昨日千鶴子より聞きし舊友の一人を  
 思ひぬ。彼方は浪子より二歳長けて一年早く大名華族の内にも才子  
 の聞へある洋行歸りの某伯爵に嫁ぎしが、舅姑の氣には入りて、良  
 人に嫌はれ、子供一人もうけながら、良人は内に妾を置き外に花柳  
 の遊に浸り今年の春離縁となりしが、つい此頃病死したりと聞く。  
 彼女は良人に棄てられて死し、吾身は相思ふ良人と裂かれて泣く。  
 さま／＼の世と思へば、彼も悲しく、此も辛く、浪子はいよ／＼動  
 うなり來る海の面を眺めて太息をつきぬ。  
 思ふ程、氣はますます亂れて、浪子は身を容るゝ餘裕もなき迄世の  
 窄きを覺ふるなり。身は何不足なき家に生れながら、懐かしき母に

は八歳の年に別れ、肩をすぼめて繼母の下に十年を送り、漸く良縁  
 定まりて父の安堵吾も嬉しと思ふ間もなく、姑の氣には入らずとも  
 良人の爲めには水火も厭はざる身の、思ひ掛なき大疾を得て、其病  
 も少しは瘥らむとするを喜べる程もなく、死ねと云はるゝは猶慈悲  
 の宣告を受け、愛し愛さるゝ良人はありながら容赦もなく間を裂か  
 れて、夫と呼び妻と呼ぶるゝこともならぬ身となり果てつ。若し其  
 程不運なる可き身ならば、何故世には生れ來しぞ。何故母上と共に、  
 吾も死なざりしぞ。何故に良人の許には嫁しつるぞ。何故に此病を  
 發せし其時、良人の手に抱かれては死せざりしぞ。何故に、せめて  
 彼恐ろしき宣告を聞ける其時、其場に倒れては死なざりしぞ。身に  
 は不治の病を懷きて、おは添はれぬ人を戀ふ。何の爲めにか世に永  
 らふ可き。假令此病瘥ふとも、添はれずば思ひ死なむ。——死なむ。  
 死なむ。何の樂ありて世に永らふ可き。







(五)の一

「姥や。御茶を入れる様にして御置き。最早彼方が入来しやる時分だよ」

斯く云ひつゝ、浪子は徐ろに髪を顧みたり。

幾は其處らを片付けながら「本當に彼方は好い方でムいますねエ。彼でも耶蘇で入らッしやいますッてねエ」

「あゝ其様だッてね」

「でも彼様な方が切支丹で入らッしやらふとは思ひませんでしたよ。加之彼様に髪を切ッて入らッしやるのですから」

「何故かい？」

「でもね、あなた、耶蘇の方では御亭主が亡なッても髪なんぞ切りま  
せんで、愈のこと假粉粧飾をしましてね、すぐとまた御嫁入の口を  
探しますとさ」

「ほゝゝ、姥やは誰から其様お事を聞いたのかい？」

「イ、エ、本當でムいますよ。一體彼宗旨では、若い娘までがそれは  
生意氣でムいましてね、本當でムいますよ。幾が親類の隣家に一人  
其様な娘がムいましてね、元はあなた溫和しい娘で、其れが彼宗旨  
の學校に入る様になりますとね、あなた、皆悉容子が變ちまいまし  
てね、日曜日になりますとね、あなた、母親が今日は忙しいから些  
手傳でもしなさいと云ひましてもね、平氣でその御寺に行ちまいま  
してね、それから學校は奇麗だけれども家は汚くて不可ないの、母  
上は頑固だの、直ぐ口を尖らしましてね、加之學校に上つて居まし  
ても、あなた、受取證が一枚書けませんでね、裁縫をさせますと、日  
が一日襦袢の袖を振くつて居ましてね、お惣菜の大根を湯煮あさい  
と申しますと、あなた、大根を組板に載せまして、庖丁を持つたきり  
呆然して居るのでムいますよ。両親も此様お事なら彼様な學校に入



れるんぢやなかつたど悔んで居ましてね。其れにあなた、其娘は私  
 はあの二百五十圓而下の月給の良人には嫁ない、なんぞ申しまして  
 ね。本當にあなた、呆れかへるぢやムいませんか。元は溫和しい娘  
 でしたのに、如何して彼様になつたんでムいませうね。此れが切  
 支丹の魔法でムいませうね」  
 「ほ、ほ、。其様でも困るのね。でも、何だツて、好所もあれば、缺  
 點もあるから、よく知らないでは云はれないよ。ね、姪や」  
 心得ずと云はむが如く小首傾けし幾は、熱心に浪子を仰ぎつゝ、「で  
 もあなた、耶蘇だけは御止し遊ばせ」  
 浪子は含笑みつ。  
 「彼方ど御話しては不可と云ふのかい」  
 「耶蘇が皆彼様な方だと宜ふムいますかね、あなた。でも——」  
 幾は口を噤みぬ。噂をすれば影歴々と西側の障子に映り來れるなり。

「御庭口から御免下さい」  
 細く和らかなる女の聲響きて、忙しく幾が起ちて開けし障子の外に  
 は、五十あまりの婦人の小作りなるがイみたり。年よりも老けて、  
 多き白髪を短く切り下げ、黒地の被布を着つ。瘦せたる上に儼れて  
 見ふれば、打見にはやゝ陰氣に思はるれど、眼に温かなる光ありて、  
 細き口元におのづからなる微笑あり。  
 幾が恰も噂したるは此人なり。未だし。一週以前に不動洞の水面  
 となる可かりし浪子を折よくも抱き留めたるは此人なりけり。  
 喇叭を吹き鼓を鳴らして名を賣ることをせざれば、知らざる者は名  
 をだに聞かざれど、知る者は其包むとすれど自づから身に溢るゝ  
 光を浴びて、永く其人を忘るゝ能はずと云ふなり。姓は小川名は清  
 子と呼ばれて、目黒の邊に大勢の孤兒女と棲み、一大家族の母とし  
 て路傍に遺棄せらるゝ幾多の靈魂を拾ひては覆翼み育つるを樂とし



つ。肋膜炎に悩みし病餘の體を養ふとて、去月の末より此地に來れるなるが、彼日、恰も不動祠にありて圖らず浪子を抱き止め、其主人を尋ねあぐみて狼狽して來れる幾に浪子を渡せしより、あつから往來の道は開けしなり。

(五)の二

茶を持って来て今罷らむとしつる幾は稍驚きて「まあ、明日御歸京遊ばすんで。へエ、折角御馴染になりかけましたのに」  
老婦人も其和らかなる眼光に浪子を包みつゝ「私も今少し逗留して、御話も致しませうし、御鹽梅の宜のを見て歸り度のでムいませうが」  
云ひつゝ懐中より小形の本を取り出し

「此は聖書ですがね。まだ御覽になつたことはムいませう」  
浪子は未だ然る書を読まざるなり。彼女が繼母は、其英國に留學しつる間は、信徒として知られけるが、歸朝の日其信仰と其聖書をば擧げて其古靴及反故と共に倫敦の假寓に遺し來れるなり。

「はい、まだ拜見致した事はムいせんが」  
幾は猶立去りかねて、老婦人が手中の書を、眼を圓にして瞻視りぬ。手品の種は彼中に、と思へるなる可し。

「此れから其の何てムいますよ、御氣分の宜しい時分に、讀んで御覽になりましたら、屹度御爲になることがあらふと思ひますよ。私も今少し逗留して居ますと、色々御話も致すのですが——今日は御告別に私が此書を読む様になりました其來歴をね、御話したいと思ひますが。」

あなた、御疲れはなさいませんか。何なら御遠慮なく御臥みなす



て

「否、些も疲れは致しません。何卒御話し遊ばして」

茶を入れかへて、幾は次に立ちぬ。

小春日の午後、夜よりも静かなり。海の音遠く、障子に映る松の影も動かず。唯遙かに小鳥の音の清きを聞く。東側の玻璃障子を透して、秋の空高く澄み、錦に染まれる櫻山は午後の日に燃へんとす。

老婦人は徐ろに茶を啜りて、俯きて被布の膝をかいた撫で、仰いで浪子の顔うちまもりつゝ、静かに口を開き始めぬ。

「人の一生は長い様で短く、短かい様で長いものですよ。秋の父は旗本で、先歴々の中でした。夙に人の有になつてしまつた

のですが、御存て入らつしやいませう、小石川の水道橋を渡つて、少し参りますと、大きな腹が茂つて居る所がありますが、私は彼屋敷に生れましたのです。十二の年に母は果てます、父は非常力を落

しまして後妻も迎らなかつたのですから、子供ながら私が色々家事を遣つてましてね。それから弟に嫁をとつて、私は矢張旗下の、格式は少し上でしたが小川の家で嫁つたのが、二十一の年、あなた方はまだ中々御生れてもなかつた頃でムいますよ。

私も女大學で育てられて、辛抱なら人に負けぬ積でしたが、實際其場に當つて見ますと、本當に身に浸みて辛いことも随分多いのでしてね。時勢が時勢で、良人は滅多に宅に居ませず、舅姑に良人の姉妹が二人、此は後で縁づきましたがいありまして、まあ主人を五人もつた譯でして、それは人の知らぬ心配も致したのですよ。舅は其

様もなかつたのですが、姑が餘程事へ難い人にして、實は私の前に、嫁に來た婦人があつたのですが、半歳足らずの間に、逃げて歸つたと云ふことで、亡なつた人を斯様申すのははしたない様ですが、氣



暴らな、押強い、辯も達者で、まあ俗に背を打つて咽をしむるなど申しますが、一寸其様な人でした。私も十分辛抱をした積ですが、其ても時々辛抱しきれないで、屏風の蔭で泣いて、赤い眼を見て叱られてまた泣いて、亡なつた母を思ひ出すのも毎々でした。其様する内に維新の騒になりました。江戸中はまるで鍋の中の様でしてね。良人も父も弟も皆義隊で上野に居ます、それに舅が大病で、私は懐妊と云ふのでしやう。本當に氣は氣でなかつたのでした。それから上野は落ちます、良人は宇都宮から段々函館まで参り、父は行衛が分からなくなり、弟は上野で討死をいたして、其家族も失踪つてしまいますし、舅も途病死をしましてね、其中で妾は産を致しますし、何が何やらもう夢の様で、それから家祿はなくなる、家財は奪られますし、私は姑と年寄の僕を一人連れましてね、當歳の兒を抱いて彼箱根を踰へて静岡に落つく迄は、恐ろしい夢を見た様

でした」  
 此時看護婦入り来りて、會釋しつゝ、藥を浪子にすゝめ終りて、出で行きたり。暫時瞑目してありし老婦人は眼を開きて、また語りつゝけぬ。  
 「静岡での幕士の苦勞は、其は御話になりません位で、將軍家が先彼通り、勝先生なんぞも裏小路の小さな家に燻つて御出の時節ですからね、五千石の私共に三人扶持は勿體ない譯ですが、併し御話ですが、其頃は豆腐が一丁とは買へませんで、加之姑は贅澤に馴れて居るのですから、本當に氣を揉みましたよ。で、私はね、町の女子供を寄せて手習や、裁縫を教へたり、夜も晩くまで、賃仕事をしましてね。其は宜いのですが、姑は愈々氣が荒くありまして、時勢の所爲を私に負はす様な譯で、それはひどく當りますし、良人は居ませず、良人は函館後は暫らく牢に入つて居ました。父の行衛も分



かりませんし、此様な事なら死んだ方がと思つたことは日に幾度もありましたが、其を思ひ返へし、して居たのです。本當に此頃は一年に年の十もとりましたのですよ。其様する内に、良人も陸軍に召出さるゝ様になつて、また箱根を越へて、最早東京です、其東京に歸つたのが、左様、明治五年の春してた。其翌春良人は洋行を命ぜられましてね。朝夕の心配はない様になつたのですが、姑の氣分は一向變りませず——其は宜いので、いすが、氣にかゝる父の行衛が如何しても分かりませぬ。良人が洋行しました其秋、非常雨の降る日でした、小石川の知已まで參つて、其家で雇つて貰つた車に乗つて歸りかけたのです。日は暮れます、ひどい雨風で、私は幌の内に小さくなつて居ますと、車夫はぼと／＼／＼引いて行きましたやう、饅頭笠を被つて皺だらけの桐油合羽を被て居るのですが、雨がたら／＼／＼合羽か

ら落ちましてね、提灯の火はちよろ／＼道の上に流れて、車夫は時々、太息をつきながら引いて行くのです。恰水道橋にかゝると、提灯が吻と消へたのです。車夫は棍棒を下して、奥様、御氣の毒です、其腰掛の下に和蘭陀附木（マツチの事ですよ）が入つてますから、と云ふのでしやう。風がひどいのでよくは聞へないのですが、其聲が變に聞いた様でね、兎角してまつちを出して、蹴込の方に向いてまつちを擦る、其火光で車夫の顔を見ますと、あなた、父ぢやムいませんか」  
老婦人は吾にもあらず顔打掩いぬ。浪子は茫然として泣けり。次の間にも飲泣の聲聞ふ。



眼を拭いて、老婦人は語り続けぬ。

「同じ東京に居ながら、知らずに居れば居られるものですね。それから父と連立つて、まあ近邊の蕎麥屋に参りましてね、様子を聞いて見ますと、上野の落ちた後は諸處方々を流浪して、手習の先生をしたり、病氣したり、今は昔の家來で駒込の隅に極々小さな植木屋をして居る其者にかゝつて、自身は斯様毎日貨車を引いて居ると云ふのでムいますよ。嬉しいやら、悲しいのやら、情けないのやら、込み上げて、碌に話も出来ないのです。それからまあ其晩は父に心づけられて別れましてね。

夜も大分深くて居ました。歸るとあなた姑は待受けて居たと云ふ體で、其は非道い怒り様苦り様で、情ないぢやムいませんか、私に何か聞いて、あるまじい所行でもある様に云ひましてね。胸をさすつて、父の事を打明けて申しますと、氣の毒と思つて呉れればですが、其

はもう聞きづらい恥しい事を——。餘り口惜くて、情なくて、今度ばかりは辛抱も何もない、もう——此家には居ない、今から直ぐと父の側に行つて、と其様思ひましてね、姑が臥せりましたあとで、袋と着物を着かへて、俵六つでした||が斯様寢んで居ます枕元で書置を書いて居ますと、俵が夢でも見たのですか、眠つたまま右の手を伸ばして「母上、行つちや嫌よ」と申すのですよ。其日小石川に参る時置いて行つたのですから、其夢を見たのでしやうが、喚驚して熟と其寝顔を見て居ますと、其顔が良人の顔其まゝになつて、私は筆を落して泣いて居ました。其様すると、まあ何如して思ひ出したのでムいますか、まだ子供の時分にね、寢物語に母から聞いた嫁姑の話、彼話が斯様不圖心に浮みましてね、あゝ私一人の辛抱で何も無事に治まること、其様思ひ直しましてね——あなた、御退屈でしやう？」



身に浸みて聽ける浪子は、答ふるまでもなく唯涙の顔を上げつ。幾  
 が新に汲める茶を啜りて、老婦人は再び談緒をつぎぬ。  
 「其れから兎や角姑に詫ましてね。併し其様な次第ですから中々父を  
 引取るの貢ぐの云ふことは出来ません。て、まあ極内々で身のま  
 わり〓多くもありませんでした〓の物なんぞ賣り拂つたり、其も  
 永くは續かないのですから、良人の知己に頼みましてね、或外國公  
 使の夫人に物好きで日本の琴を習いたいと云ふ人がありましてね、  
 それで姑の前を兎や角して其れから月に幾回琴を教へて、先少しは  
 父を樂にすることが出来たのですが、其様する内に、其夫人と戀意  
 になりましてね、其は珍らしいやさしい人として、時々は半解の日  
 本語で色々話をしましてね、讀むて御覽なさいと云つて本を一冊呉  
 れました。其れがね、其頃初めて和譯になつた馬太傳——此聖書の  
 初にありますのでした。少し讀みかけて見たのですが、何だか變な

事ばかり書いてありまして、まあ其儘に放棄つて置いたのでした。  
 其れから翌年の春、姑は突然中風になりましてね、氣の強い人でし  
 たが、其れはもう子供の様に、非常淋しがつて、一寸でもはづします  
 と、お清お清と直ぐ呼ぶのでムいますよ。側に坐つて、蠅を追いな  
 がら、すやく／＼眠る姑の顔を見て居ますと、本當に斯様なるものを  
 何故一度でも心に恨んだことがあつたらう、出来ることなら今一度  
 丈夫にして、ど其様思ひましてね、精一杯骨を折つたのですが、其  
 甲斐もないのでした。  
 姑が亡くなりますと程なく良人が歸朝しましてね、それから引取ると  
 云ふ際になつて、父も安心した故ですか、急に病氣にあつて、僅二  
 三日で其れこそ眠る様に消へました。最早生涯會はれぬと思つた娘  
 には會ふし、やさしくして呉れるし、自分程果報者は無いと、其様  
 申しましてね、——でも私は思ふ十分一も出来ませんで、今でも思ひ



出す度に今一度活かして思ふ存分喜ばして見たいと思はぬ時はありませぬよ。

其れから良人は次第に立身致します、倅は大きくなりましたして、私も餘程樂になつたのですが、唯氣を揉みましたのは、良人の大酒——軍人は多く其様ですが——の癖でして。其れから今でも矢張其様ですが、其頃は別してね、男子の方で不行跡で、良人なんぞはまあ西洋にも参りますし、少しは宜のてしたが、其でも恥しい事ですが、私も随分心配を致しました。其となく異見をしまして、あなた、笑つて取合ませぬのですよ。

其様する内に彼十年の戦争になりましたして、良人——近衛の大佐でした。四月十八日の夜でした、倅が少し宜い方で眠んで居ますから、婢なぞも皆寝せまして、私は倅の枕元に、行燈の光で少し縫物をし

て居ますと、ついうと／＼致しましてね。斯様氣が遠くなりますと、すうと人の来る氣はいが致して、倅の枕元に坐る者があるのです。誰かと思つて見ますと、あなた、良人です、軍服のまゝで、血だらけになりましたして、蒼ざめて——ま、良人、思はず云つた其聲にふつと眼がさめて、四邊を見ると誰も居ません。行燈の火がどろ／＼燃へて、倅はすやすや眼つて居ます。もう悉皆汗になりましたして、動悸

が劇しくうつて——其翌日から倅は急に悪くなりましたして、到頭其夕刻に息を引取りましたね。もう夢の様になりました、骸を抱いて居る内に、着たのが良人が討死の電報でした」

話者は口を噤み、聽者は息をのみ、室内森として水の如くなりぬ。良久ふして、老婦人は再び口を開けり。「其れから一切夢中してね、日と月と一時に沈つたと申しませうか、



何と申しませうか、其れこそ眞に眞暗になりまして、辛抱に辛抱して結局が此様な事かと思ひますと、寧ろ此儘癒らずに——すぐ其後で臥病しましたのですよ——と思つたのですが、幸か不幸か病氣は段々よくなりましてね。

病氣はよくなつたのですが、最早私には世の中が悉皆空虚になつた様で、たい生きて居ると云ふばかりでした。其様する内に、知己の勸で兎に角家をたゝむて暫く其宅に參ることになりましたね、病後ながらぶら／＼道具や何角取り細めて居ますと、何時つてしたか筆筒を明けますとね、亡くなりましたした悴の袷の下から書が出て參りましたね、不圖見ますと先年外國公使の夫人が呉れました其聖書でムいませよ。讀むでもなくつい見て居ますと、一寸した文句が、斯様妙に胸に響く様な心地がしましてね——其れ此書にも符號をつけて置きましたか——其れから知己の宅に越しましても、時々讀むで居まし

た。讀むて居ます内に、山道に迷つた者が何處かに鶏の聲を聞く様か、眞闇な晩に微かな光が何處からか射す様に思ひましてね。最早其書を呉れた公使の夫人は歸國して、居なかつたのですが、誰かに話を聞いて見たいと思つて居ます内に、知己の世話で其頃出來ました女の學校の舎監になつて見ますと、其れが耶蘇教主義の學校でして、其教師の中にまだ若い御夫婦の方でしたが、其れ熱信な方がありましてね、此御夫婦が私のまゝ先達になつて下すつたのですよ。其先達に初歩を教はつて此道に入りましてから、今年で最早十六年になりますよ、杖も思ふは實に此書で、一日も傍を放さないのてムいますよ。靈魂不死と云ふ事を信じてからは、死を限りと思つた世の中が廣くなりまして、天の父を知つてからは親を失つてまた大きな親を得た様で、愛の働を聞いてからは子を失くしてまた大勢の子を貰つた心地で、望と云ふ事を教へられてから、辛抱をするにも



樂がつきましてね——  
 私が此書を読む様になりました來歴は先ざつと此様でいますよ——  
 斯云ひ來りて、老婦人は熱心に浪子の顔打まもり、  
 「實は、御様子は薄々承はつて居ましたし、彼様して時々濱で御眼に  
 かゝるのですから、是非伺いたいと思ふ事も度々あつたのですが、  
 ——其が斯様不圖御心易く致す様にありますと、また直ぐ御別れ申  
 すのは、寔に残念でいますよ。併し斯様申しては如何でいます  
 が、私には如何しても淺日の御面識の方とは思へませんよ。何卒御  
 身を大事に遊ばして、必氣を永く御持ち遊ばして、ね、決して短氣  
 を御出しなさらぬ様に——御氣分の宜い時分は此書を御覽遊ばして  
 ——私は東京に歸りまして、朝夕此方の事を思て居りますよ」

\* \* \* \* \*

老婦人は其翌日東京に去りぬ。然れど其贈れる一書は常に浪子の身  
 近に置かれつ。  
 世には斯る不幸を経ても猶人を慰むる誠を餘せる人ありと思へば、  
 母ならず伯母ならずして猶此茫々たる世に吾を思ひ呉る人ありと  
 思へば、浪子は聊か慰めらるゝ心地して、聞きつる履歴を時々思ひ  
 出ては、心籠めたる贈物の一書を繕けるなり。



(六)の一

第二軍は十一月廿二日を以て旅順を攻落しつ。

「阿母、阿母」

新聞を持ちたるまゝ、遠しく千鶴子は其母を呼びたり。

「何ですぬ。今些静かに言を御云ひなさいな」

水色の眼鏡に一寸睨まれて、さつと面に紅潮を散らしながら、千鶴子はほへと笑ひしが、また真面目になりて、

「阿母、死ましたよ、彼男が——彼千々岩が！」

「エ、千々岩！彼千々岩が！如何して？戦死かい？」

「戦死將校の中に名が出て居るわ。——好氣味！」

「また其様なはしたないことを。——そうかい。彼千々岩が戦死したのかい！でもよく戦死したねエ、千鶴さん」

「好氣味！彼様な人は生きて居たつて、邪魔になるばかりだわ」

加藤子爵夫人は暫し黙然として沈吟じぬ。

「死んでも誰一人泣いて呉れる者もない位では、生甲斐のないものだね、千鶴さん」

「でも川島の老媪が泣きませうよ。——川島では、阿母、お豊さんが頭逃げ出しましてよ」

「左様かい？」

「昨日ね、また何か始めてね、最早々々此様な家には居ないつて、泣きく歸つちまいましたんですつて。ほ、ほ、容子が見たかつたわ」

「誰が行つても彼家では納るまいよ、喃千鶴さん」  
母子相見て言葉途絶へぬ。

\* \* \* \* \*



千々岩は死せるなり。千鶴子母子が右の問答をなしつるより廿日は  
 かり立ちて、一片の遺骨と一通の書と寐しき川島家に届きたり。骨  
 は千々岩の骨、書は武男の書なりき。其數節を摘みてむ。

〔前文略〕

旅順陥落の翌々日、船渠船舶等艦隊の手に引取ること、相成、將  
 校以下數名上陸致し、私儀も上陸仕候。激戦後の事にて、慘狀は  
 筆紙に難盡〔中略〕假設野戰病院の前を過ぎ候處、不圖擔架にて人  
 を運居候を見受申候。青毛布を覆ひ、顔には白木綿のきれをかけ  
 て有之、其きれの下より見へ候口元願の邊如何にも見覺へある様  
 にて、尋ね申候得者、此は千々岩中尉と申候、其時の輿驚御察可  
 被下候。〔中略〕覆をとり申候へば、色蒼ざめ、緊く齒を切り居申  
 候。創は下腹部に一ヶ所、其他二ヶ所、何れも椅子山砲臺攻撃の  
 際受け候彈創にて、今朝まで知覺有之候處、終に絶息致候由。〔中

〔零〕猶同人の同僚に就き色々承はり候處、彼は軍中の惡まれ者な  
 がら戦争の初は随分相働き、已に金州攻撃の際も、部下の兵士と  
 南門の先登を致候由にて、今回も中々働き候どの事に御座候。尤  
 も平生は往々士官の身にあるまじき所行も内々有之、陣中あがら  
 身分不相應の金子を貯へ居申候。已に一度は鴉子窩に於て、軍司  
 令官閣下の嚴令あるに拘はらず、何か徵發致候とて士民に對し慘  
 刻千萬の仕打有之已に其處分も可有之處。〔中略〕兎に角戦死は彼  
 が爲に勿怪の幸に可有之候。

母上様御承知の通り、彼は重々不埒の廉も有之彼が爲めには實に  
 迷惑も致し、私儀も已に断然絶交致居候事に有之候得共、死骸に  
 對しては恨も無御座、昔兄弟の様に育ち候事など思ひ候得者、不  
 覺の落涙も仕候事に御座候。依て許可を受け、火葬致し、骨を御  
 送り申上候、可然御葬り置被下度奉願候。



〔下略〕

武男が旅順にて遭遇しつる事は此に止まらず、故意書中に漏らし、一々の出来事ありき。

(六)の二

武男が書中に漏たる事實は、左の如くなりき。千々岩の死骸に會へる其日、武男は獨り遅れて埠頭の方に歸り居たり。日暮れぬ。

舍營の門口に兎めく歩哨の銃劍、將校馬蹄の響、下士を叱り居る士官、呆れ顔に行む清人、縦横に行き違ふ軍屬、其等の間を縫ふて行けば、軍夫五六人、焚火にあたりつ。

「滅法寒いぢやねへか。故國に居りや、葱餅で一盃てへ所だ。吉、貴

公アまた好い物引被けて居やがるぢやねへか」

吉と云はれし軍夫は、分捕なる可し、紫緞子の美々しき胴衣を着たり。

「源公を見ねへ。狐裘の四百兩もするてへやつを着てやがるぜ」

「源か。彼奴位馬鹿に運の強へ奴ア無へぜ。博ちやア勝つ、遊んで褒

美は貰へやがる、鐵砲玉ア中りッこなし、運の好えた彼奴の事だ。

乃公なんぞ大連灣でもつて、から負けちやつて、此裕一貫よ。畜生

め、分捕でもやつつけねえぢや、本當に遣り切れねへや」

「分捕も宜いが、用心ねへ。先刻も乃公あうつかり陥込むと、殺戮に

來たと思ひやがつたんだね、突然桶の後から抜劍の清兵が飛び出し

やがつて、乃公お今些で婆婆に御別れよ。丁度兵隊さんが來て清兵

め直々斃つちまやがつたが、乃公お肝潰しちやつたぜ」

「馬鹿な清兵ぢやねへか。未だ殺され足りねへてんだな」



旅順落ちて未だ幾日もあらざれば、實に清兵の人家に隠れて搜し出されて抵抗せし爲め殺さるゝも少なからざりけるなり。

開くともなき話耳に入りて武男は聊か不快の念を動かしつゝ、次第に埠頭の方に近づきたり。此あたり人氣少なく、燈火疎らにして、一方に建て列ねたる造兵廠の影黒く地に敷き、一方には街燈の立ちたるが、薄月夜程の光を地に落し、瘠せたる狗ありて、地を嗅ぎて行けり。

武男は此建物の影に沿ふて歩みつゝ、眼は忽ち二十間を隔て、先きに歩み行く二個の人影に注ぎたり。後影は確かに我陸軍の將校士官の中なる可し。一人は潤大に一人は細小なるが、打連れて物語などして行くさまなり。武男は其人を何處にか見覺ある様か思ひぬ。

忽ち武男は吾と彼兩人の間に更に人ありて建物の陰を忍び行くを認めつ。胸は不思議に躍りぬ。家の影さしたれば、明らかに見えざ

れど、影の中なる影は、一步進みて止まり、二歩行きて覗ひ、まさしく二人の後を追ふて次第に近き居るなり。たま／＼家と家との間絶へて、流れ込む街燈の光に武男は其の清人なるを認めつ。同時にものありて彼が手中に閃めくを認めたり。胸打騒ぎ、武男は竊かに足を早めて其後を慕ひぬ。

最先に歩める彼二人が今しも街の端に到れる時、闇中を歩める彼黒影は猛然と闇を離れて、二人を追ひぬ。驚きたる武男がついて走り出せる時、清人は已に六七間の距離に迫りて、右手は上り、短銃細き、細長なる一人は撞と倒れぬ。驚きて振り顧る他の一人を今一發、短銃の響をひかむとする時、霧地に馳せつきたる武男は拳をあげて折れよと彼が右腕を敲きつ。短銃落ちぬ。驚き怒りてつかみかゝれる彼を、武男は打倒さむと相撲ふ。彼潤大なる一人も走せ來りて武男に力を添むとする時、短銃の音に驚かされし我兵士ばらば



らど走せ來り、武男が手にあまる彼清人を直ちに蹴倒して引く、りぬ。瞬間の争に汗になりたる武男が混雑の間より出てける時、倒れし一人を扶け起せる彼潤大なる一人は此方に向ひ來りぬ。此時街燈の光はまさしく片岡中將の面をば照らし出した。武男は思はず叫びぬ。「やあ、閣下は！」

「貴下は！」

片岡中將は其副官と何方へか行ける歸途を、殊勝にも清人の狙へるなりき。

副官の疵は重かりしが、中將は微傷だも負はざりき。武男は圖らずして乃勇を救へるなり。

\* \* \* \* \*

此事何れよりか傳はりて、浪子に達せし時、幾は限りなく欣びて

「御覽遊ばせ。如何しても御縁が盡さぬのでムいませすよ。精出して御養生遊ばせ、ねエ、精出して養生致しませうねエ」浪子は淋しく打合笑みぬ。



比  
不  
化

(七)の一

戦争の中に、年は暮れ、且つ明けて、明治二十八年となりぬ。  
 一月より二月にかけて威海衛落ち、北洋艦隊亡び、三月末には南の  
 方澎湖列島己に我有に歸し、北の方には我大軍潮の如く進みて、遼  
 河以東に隻騎の敵を見ず。尋て媾和使來り、四月中旬には平和條約  
 締結の報遍ねく傳はり、三國干涉の噂についで、遼東還附の事あり。  
 同五月末大元帥陛下凱旋し玉びて、戦争は宛ながら大鵬の翼を收む  
 る如く倏然として已みぬ。  
 旅順に千々岩の骨を收め、片岡中將の危厄を救ひし後、武男は威海  
 衛の攻撃に従ひ、また遠く南の方澎湖島占領の事に従ひしが、六月  
 初旬其乗艦の一先づ横須賀に凱旋する都合となりたるより、久々振  
 に歸京して、絶て久しき吾家の門を入りぬ。  
 想へば去年の六月、席を隔つて母に辭したりしより己に一年を過ぎ

ぬ。幾たびか死生の際を通り來て、曩日の不快は薄らぐともなく痕  
 を滅し、佐世保病院の雨の日、威海衛港外風氷る夜は想の吾家に向  
 つて飛びしこと幾回ぞ。  
 一年振りに歸りて見れば、家の内何の變りたることもなく、吾車の  
 音に出迎へつる婢の顔の新しくかはれるのみ。母は例の如く肥え太  
 りて、僕麻質斯起れりとして、一日床にあり。田崎は例の如く日々來  
 りては、六疊の一間に控へ、例の如く事務をとりてまた例刻に歸り  
 行く。型に入れたる如き日々、見るもの、聞くもの、宛がらに  
 去年のまゝなり。武男は望を得て望を失へる心地しつ。一年振りに  
 母に逢ひて、絶へて久しき吾家の風呂に入りて、堆き蒲團に安座し  
 て、好める饌に向ひて、さて釣床ならぬ黒天鴉絨の括り枕に疲れし  
 頭を横へて、然も夢は結ばれず、枕邊近き時計の一二時を拍つまで  
 も、眼はいよ／＼涙へて、心の奥に一種鋭き苦痛を覺へしなり。



一年の月日は母子の破綻を繕ひぬ。少くも繕へるが如く見へぬ。母も流石に喜びて其獨子を迎へたり。武男も母に會ふて一の重荷をば卸しぬ。然れど二人が間は、顔見合せし其時より、全く隔なき能はざるを武男も母も覺へしなり。浪子の事をば、彼も問はず、此も語らざりき。彼の問はざるは問ふことを欲せざるが爲にあらざりて、此の語らざるは彼の聞かんことを欲するを知らざるが爲めにはあらざりき。唯彼此共に此危険の問題をば務めて避けたるを、互に其ど知りては、相對ひて話途絶ふる毎にあのづから坐の安からざるを覺ふるなりき。

佐世保病院の贈物、旅順の彼出來事、其はなくとも素より忘るゝ時はなきに、今昔共に棲みし家に歸り來て見れば、見る物毎に其面影の忍ばれて、武男は怪しく心地亂れぬ。彼女は今何處に居るやらむ。吾が歸り來しと知らずやあらむ。思は千里も近しとすれど、縁絶て

は一里も距れぬ片岡家、宛ながら日よりも遠く、彼女が伯母の家は呼べば應ふる近邊にありながら、何の顔ありて行きて其消息を問ふ可きや。想へば去年の五月艦隊の演習に赴く時、返子に立寄りて別を告げしが一生の別離とは知らざりき。彼時別荘の門に送り出で、早く歸つて頂戴」と呼びし聲は今も耳底に残れど、今は誰に向ひて今歸つた」と云ふ可きぞ。

斯く思ひつゞけし武男は、一日横須賀に赴きし次に返子に下りて、彼別墅の方に迷ひ行けば、表の門は閉ぢたり。借は歸京せしかと思ひ詫びつゝ、裏口より入り見れば、老爺一人庭の草を撈り居つ。

(七)の二

武男が入り來る足音に、老爺は徐ろに振り顧へりて、其と見るより



聊驚きたる體にて、鉢巻をとり、小腰を屈めながら

「此は御出なさいまし。旦那様何時御歸りでムいましたんで？」

「二三日前に歸つた。老爺も相變らず達者で宜いな」

「如何致しまして、はあ、ねつから宜ませんで、はあ御世話様になり

ますてムいますよ」

「何かい、老爺は最早餘程長く留守をしとるのか？」

「否、何てムいますよ、其の、先月までは奥様——御嬢様——御病人

様と姪やさんが御出なされたんで、其後まあ老爺が御留守を致して

居るでムいますよ」

「其ては先月歸京つたんだね。——ては東京に居るのださ」と武男は獨

語らぬ。

「はあ、左様さまで。殿様が清國から御歸りなさる其前に、東京に御

歸りなされたてムいますよ。はあ、其れから殿様と御一處に京都に

行かつしやりました御様子で、未だ歸京らつしやりますめえと、はや

思ふでムいますよ」

京都に？——では病氣が宜いのだな」武男は再び獨語らぬ。

「で、京都に何時行つたのだね？」

「四五日前——」と云ひかけしが、老爺は不圖今の關係を思い出で、

云ひ過ぎはせざりしかと思ひ、貌に忽ち口を噤みぬ。其と感ぜし武男

は思はず顔を赧らめたり。

彼此相對いて暫し黙然として居たりしが、老爺は流石に氣の毒と思

ひ返へし、様に、

「一寸戸を明けますべし。旦那様、御茶でも上つてまあ御休みなさッ

て御出なさいましよ」

「何、構はずに置いて貰はう。一寸通りかゝりに寄つたんだ」

云ひ棄てし武男は曾て來馴れし屋敷内を廻り見れば、流石に守る人



われは荒れざれど、戸は悉く閉めて、手水鉢に水絶へ、庭の青葉は茂りに茂りて、所々に梅子こぼれ、青々としたる芝生に咲き残れる薔薇の花半ば落ちて、ほのかなる香は庭に満ちたり。何處にも人の氣はなく、屋後の松に蟬の音のみぞ喧しき。

武男は匆匆に老爺に別れて、頭を垂れつゝ出で去りぬ。

五六日を経て、武男はまた家を辭して遠く南征の途に上ることゝなりぬ。家に歸りて十餘日、他の同僚は凱旋の歡迎のと面白く騒ぎ過ぎてせるに引易へて、武男は面白からぬ日を送れり。遠く離れては流石になつかしかりし家も、歸りて見れば思ひの外に面白き事もなく、武男は終に其心の缺陷を満す可きものを得ざりしなり。

母も其と知りて、苦々しく思へる容子は自づから言葉の端にあらはれぬ。武男も母の其と知れるをば知り得て、相對ひて語る毎にもありて間を隔つる様に、覺へつ。されば母子の間は疊時の如き破

裂こそなかりしが、武男は一年後の今の却て疊時よりも母に遠かるを憾みて、猶遠かるを奈何ともする能はざりき。母子は冷然として別れぬ。

横須賀より乗る可かりしを、出發に垂として障ありて一日の期を愆まりたれば、武男は吳より乗ることに定め、六月の十日と云ふに孤影蕭然として東海道列車に乗りぬ。



宇治の黄檗山を今しも出て来りたる三人連れ。五十餘と見ふる肥満の紳士は、洋装して、金頭のステッキを持ち、甘許りの淑女は黒綾の洋傘を翳し、其後より五十あまりの婢らしきが信玄袋を提げて従ひたり。

三人の出で来ると共に、門前に待ち居し三輦の車がらくと引き来るを、老紳士は洋傘の淑女を顧みて

「好天氣ぢや。些し歩いて見れば奈何か」

「歩きませう」

「御疲れは遊ばしませんか」と婢は口を添へつ。

「宜いよ、少しは歩いた方が」

「ぢや疲れたら乗るとして、先ぶらく歩いて見るも宜ぢやらう」

三輦の車を後に従へつ、三八は徐ろに歩み初めぬ、云ふ迄もなく

此は片岡中將の一行なり。昨日奈良より宇治に宿りて、平等院を見、扇の芝の昔を吊ひ、今日は山科の停車場より大津の方へ行かむとするなり。

片岡中將は去る五月に遼東より凱旋しつ。一日浪子の主治醫を招きて書齋に密談せしが、其翌々日より、浪子を伴ひ、婢の幾を従へて

飄然として京都に来つ。閑静なる河添の宿を擇みて、此處を根據地と定めつ、軍服を脱ぎ棄て、平服に身を包み、人を避け、公會の

招を辭して、唯日々浪子を連れては彼女が意の嚮ふまゝに、博覽會を初め名所古刹を遊覽し、西陣の織物を求め、清水に土産を買ひ、

優遊の限りを盡して、こゝに十餘日を過ぎぬ。世間は暫し中將の行衛を失ひて、浪子獨り其父を占めけるなり。

「黄檗を出れば日本の茶摘かな」。茶摘の盛季は夙過ぎたれど、風は時々培爐の香を送りて。此處其處に二番茶を摘む女の影も見ゆなり。



茶の間々は麥黄く熟れて、絞々と鎌の音聞ふ。眼を上ぐれば和州の山遠く夏霞に薄れ、宇治川は麥の穂末を渡る白帆にあらはれつ。彼方に屋根のみ見ふる村里より午鶏の聲緩く野づらを渡り来て、打仰ぐ空には薄紫に焦れし雲浮々と漂ひたり。

浪子は吐息つきぬ。  
 忽ち左手の畑路より、夫婦と見ゆる百姓二人話してもて出で来りぬ。午餉を終へて今しも圃に出で行くなる可し。男は鎌を腰にして、女は白手拭を冠り、齒を染め、土瓶の大なるを手に提げたり。出會ひざまに、立とまりて、暫し一行の様子を見し女は、行き過ぎたる男の後小走りに追ひかけて、何か囁きつ。二人共に振り顧へりて、女は美しく染めたる齒を見せつ含笑みしが、また相語りつゝ花茨こぼるる畔道に入り行きたり。竹の子笠と白手拭は、次第に黄ばめる麥浪子の眼は其後を追ひぬ。

に沈みて、頓で影も見へずなりしと思へば、忽ち畑の彼方より「郎は正宗、儂あ錆刀、郎は切れても、儂あ切られぬ」歌と聲哀々として野づらに散りぬ。浪子はさし俯むきつ。ふりかへり見し父中將は「草臥れたぢやらう。どれ——」云ひつゝ浪子の手をとりぬ。

(八)の二

中將は浪子の手をひきつゝ、年の経つは早いものぢや。浪、卿は記憶へて居るかい、卿が幼少かつた頃、よく阿爺に負さつて、ばんく阿爺が横腹を蹴つたりし居

父の遺言  
 浪子の手をひきつゝ



つたが。そうぢや、卿が五つ六つの頃ぢやつたの」  
 「あは、い、左様でムいしましたよ。殿様が負遊ばしますと、少嬢様  
 がよく御むづかり遊ばしたんでムいしますね。——唯今も如何様に御後  
 ましがつて居らッしやるかも分かりませんでムいしますよ」と氣輕に  
 幾が相槌うちぬ。  
 浪子は唯淋しげに含笑みつ。

「駒か。駒には御詫に澤山土産でも持つて行くぢや。喃、浪。駒よか  
 千鶴さんが羨ましがつとるぢやらふ、一度此地に來たがつて居つた  
 のぢやから」  
 「左様でムいしますよ。加藤の御嬢様が御出遊ばしたら、如何様に御賑  
 やかでムいませしやう。——本當に私あそがまわ此様な珍しい見物さし  
 て戴きまして——あの何でムいしますか、先刻渡りました彼川が宇治  
 川で、あの螢の名所で、ではあの駒澤が深雪に逢ひました所でムい

ますね」

「は、い、い、幾は中々學者ぢやの。——いや世の中の變移は甚いものぢ  
 や。阿爺なぞが若かつた時分は、大阪から京へ上ると云ふと、何時  
 も彼三十石で、鮮の様詰められたものぢや。否、其れよか阿爺がの、  
 二十の年ぢやつた、大西郷と有村——海江田と月照師を大阪迄運出  
 した後で、大事な要が出來て、阿爺が行くことになつて、さあ後追  
 かけたが、除り急いで一文無しぢや。到底頬冠をして跣足で——夜  
 ぢやつたが——伏見から大阪まで川堤を走つたこともあつたのぢや。  
 は、い、い。——暑いぢやないか、浪、草臥れると宜かん、最早少し乗  
 つたら奈何ぢや」

「ぢや、徐々挽つて呉れ」  
 後れし車を幾が手招けば、からくと挽き來三人は乗りぬ。  
 車は徐々に麥圃を穿ち、茶圃を貫きて、山科の方に向ひつ。



前なる父が頂の白髪を見つめて、浪子は思に沈みぬ、良人に別れ。不治の疾を懐いて、父に伴はるゝ此遊を、嬉しと云はむか、哀しと思はむか。望も樂も世に盡き果て、遠からぬ死を待つ吾を不幸と謂はし、其吾を思ひ想ふ父の心も酌むに難からず。浪子は限り無き父の愛を想ふにつけても、今の身は唯慰めらるゝ外に父を慰む可き道なきを哀しみつ。世を忘れ人を離れて父子唯二人名残の遊をなす今日此頃は、せめて小供の昔にかへりて、物見遊山も吾れから進み、やがて消ふ可き空蟬の身には要なき唐織物も、未は妹に紀念の品と、殊に菲美なるを撰みしなり。父を哀しと思へば、戀しきは武男。旅順に父の危難を助け玉しとばかり、後の消息は誰傳ふる者もなく、思は飛び夢は通へど、今に何處にか居玉ふらむ。逢ひたし、一度逢ひたし、生命ある中に一度、唯一度逢ひたしと思ふにつけて、先刻聞きつる郎歌の生憎耳に響き、

彼百姓夫妻の陸じく語れる面影は眼前に浮び、樂しき粗布に引かへて愛を包む風通の袂恨めしく――せぐり来る涙を手巾に抑へて、泣かじと唇を噛めば、生憎咳嗽の連りに濡れぬ。中將は氣遣はしげに、回顧へりつ。「最早宜ふムいます」浪子は縋かに笑を作りぬ。

\* \* \* \* \*

山科に着きて、東行の列車に乗りぬ。上等室は他に人もなく、浪子は開ける窓の側に、父は彼側に座して新聞を廣げつ。折から煙を噴き地を轟かして、神戸行の列車は東より來り、まさに出でむとする此方の列車と相雙びたり。客車の戸を開閉する音、ア



ラットフォームの砂利踏にぢりて驛夫の「山科、山科」と叫び過ぐる  
 彼方に開ふると共に、此方の汽笛鳴りて列車は徐ろに動き初めぬ。  
 開ける窓の下に座して、浪子は徐ろに移り行く彼方の列車を眺めつ。  
 恰も彼中等室の前に來し時、窓に頬杖つきたる洋装の男と顔見合は  
 したり。

「ま、真人！」

「あゝ浪さん！」

此は武男なりき。  
 車は過ぎむとす。狂せる如く、浪子は窓の外にのび上りて、手に持  
 てる藍色の手巾を投げつけつ。「御危ふムいますよ、御嬢様」幾は驚  
 きて確と浪子の袂を握りぬ。  
 新聞手に持ちたるまゝ中將も立上りて窓の外を望みたり。  
 列車は五間過ぎ——十間過ぎぬ。落つばかりのび上りて、回顧りた

る浪子は、武男が狂へる如く彼手巾を振りて、何か呼べるを見つ。  
 忽ち軌道は山角を廻りぬ。兩窓の外青葉の山あるのみ。後に開ふる  
 帛を裂く如き一聲は、今しも彼列車が西に走れるならむ。  
 浪子は顔打掩ひて、父の膝に俯きたり。



(九)の一

七月七日の夕、片岡中將の邸宅には、人多く集いて、普低聲に言へり。令嬢浪子の疾革まれるなり。豫ては一月の餘も二期せられつる京洛の遊より、中將父子の去月下旬俄かに歸り來れる時、玄關に出て迎へし者は、醫ならざるも浪子の病勢大方ならず進めるを疑ふ能はざりき。果して醫師は、一診して覺へず顔色を變へたり。月ならずして病勢遽かに加はれるが上に、心臓に著しき異状を認めたるなりき。是れより片岡家には、深夜も燈燃へて、醫は間斷なく出入し、月末より避暑に赴く可かりし子爵夫人も流石に暫し其行を見合はしつ。名醫の術も施すに由なく、幾が夜毎日毎の祈念も甲斐なく、病は日に募りぬ。數度の咯血、其間々には心臓の痙攣起り、劇しき苦痛のめとは概憚々として謔言を發し、今日は昨日より、翌日は今日より、

お愛之ん花  
ソノ心  
下

衰弱いよく加はりつ。其咳嗽を聞いて連夜睡らぬ父中將の吾枕頭に來る毎に、浪子は仄かに笑みて苦しき息を忍びつゝ、明かに言へど、うとうととなりては絶へず武男の名をば呼びぬ。

今日明日と醫師の殊に戒めし其今日は夕となりて、部屋々々は燈遍ぬく點きたれど、聲高に言ふ者もなければ、森々として人ありとは思はれず。今皮下注射を終へたるあとを暫し静かにすどて、廊下傳ひに離家より出て來し二人の婦人は、小座敷の椅子に倚りつ。一人は加藤子爵夫人なり。今一人は曾て浪子を不動洞畔に救し彼老婦人なり。去年の秋の暮に別れしより、暫らく相見ざりしを、浪子が父に請いて使して招けるなり。種々御親切に——有り難ふムいます。姪も一度は御目にかハッて御



禮を申さなければならぬと、其様言いく致して居りましたのです  
 が、御眼にかゝりまして本望でムいませう」加藤子爵夫人は緩  
 かに口を開きぬ。  
 答ふ可き辭を知らざる様に、老婦人は唯太息つきて頭を下げつ。や  
 いありて聲を低くし

「て——は何方に御出なさいますので？」

「臺灣に参つたさうでムいます」

「臺灣——」

老婦人は再び吐息つきぬ。

加藤子爵夫人は湧き来る涙を辛ふじて抑へつ。

「てムいませんと、彼通り思つて居るのでムいませすから、世間體は如  
 何とも致して、逢はせも致しませうし、暇乞も致させたいのですが  
 ——何を云つても昨日今日臺灣に着いたばかり、其れが外と違つて

軍艦に乗つて居るのでムいませすから——」

折りから片岡夫人入り來つ。其後より眼を泣腫らしたる千鶴子は急  
 き足に入り來りて、其母を呼びたり。

(九)の二

日は暮れぬ。去年の夏新に建てられし離家の十疊には、燭臺の光ほ  
 のかにさして、大なる寢臺一つ据へられたり。其雪白なる敷巾の上  
 に、眼を閉ちて、浪子は横はりぬ。

二年に近き病に、瘡せ果てし軀は更に瘡せて、肉と云ふ肉は落ち、  
 骨と云ふ骨は露はれ、蒼白き面のいと透き徹りて、唯黒髪のみ昔  
 ながらに艶々と照れるを、長く組みみて枕上に垂らしたり。枕頭には  
 白衣の看護婦が氷に和せし赤酒を時々筆に含まして浪子の唇を濕し



つ。此方には今一人の看護婦と共に、眼回み頬落ちたる幾が俯きて足を摩りぬ。室内森々として、唯忽ち急に忽ち微かになり行く浪子の呼吸の聞ふるのみ。

忽ち長き息つきて、浪子は目を開き、微かなる聲を漏らしつ。

「伯母さまは——？」

「来ましたよ」

言ひつゝ徐かに入り来りし加藤子爵夫人は、看護婦が薦むる椅子を更に臥床近く引寄せつ。

「少しは睡れましたか。——何？左様かい。では——」看護婦と幾を顧みつゝ、「少しの間彼方へ」三人を出し遣りて、伯母は猶近く椅子を寄せ、浪子の額にかゝる後れ毛を撫で上げて、しげくと其顔を眺めぬ。浪子も伯母の顔を眺めぬ。

やゝありて浪子は太息と共に、わな／＼と腹ふ手をさしのべて、枕

の下より一通の封ぜし書を取り出し

「此を——届けて——私になくなつた後で」

ほろ／＼とこぼす涙を拭ひやりつゝ、加藤子爵夫人は、更に眼鏡の下よりはふり落つる涙を拭ひて、其書を確と懐に藏め、

「届けるよ、屹度私が武男さんに手渡すよ」

「其れから——此指環は」

左手を伯母の膝にのせぬ。其第三指に燦然と照るは一昨年春、新婚の時武男が贈りしなり。去年去られし時、彼家に属するものをば盡く送りしも、獨り此のみ愛みて手離すに忍びざりき。

「此は——持つて——行きますよ」

新に湧き来る涙を抑へて、加藤夫人は唯頷きたり。浪子は眼を閉ぢ

ぬ。やゝありてまた開きつ。

手紙  
加藤子爵夫人  
浪子



「如何していらっしやる——でせう？」  
 「武男さんは最早臺灣に着いて、屹度種々此方を思いやりながら働いて居なさるでしやう。近くにさへ居なされば、如何ともして、ね、——其様阿爺も仰有つて御出だけれども——浪さん、卿の心盡しは屹度私が——手紙も確かに届けるから」  
 仄かなる笑は浪子の唇に上りしが、忽ち色なき頬のあたり紅をさし來り、胸は波うち、燃ばかり熱き涙はらくと苦しき息をつき、  
 「あ、辛い？ 辛い？ 最早——最早婦人なんぞに——生れはしませんよ。——苦しい！」  
 眉を擧め胸を抑へて、浪子は身を悶へつ。急に醫を呼びつゝ、赤酒を含ませむとする加藤夫人の手に絶りて半起き上り、生命を縮むる咳嗽と共に、肺を絞つて一盞の紫血を吐きつ。悟々として臥床の上に倒れぬ。

醫と共に、皆入りぬ。

(九)の三

醫師は騒がず看護婦を呼びて、應急の手段を施しつ。指圖して寢床に近き玻璃窓を開かせたり。  
 涼しき空氣は一陣水の如く流れ込みぬ。眞黒き木立の背ほのかに明みたるは、月出てむとするなる可し。  
 父中將を首として、子爵夫人、加藤子爵夫人、千鶴子、駒子、及び幾も次第に臥床を繞りて居流れたり。風はそよ吹きて已に死せるが如く横はる浪子の髪を戦がし、醫は頻りに患者の面を覗ひつゝ、脈をとれば、此方に立てる看護婦が手中の紙燭はたくとゆらめいたり。



十分過ぎ十五分過ぎぬ。寂かなる室内幽かに吐息聞へて、浪子の唇  
 纒かに動きつ。醫は手づから一七の赤酒を口中に注ぎぬ。長き吐息  
 は再び寂なる室内に響きて、  
 「歸りましやう、歸りましやう、ねエあなた——阿母、來ますよ來ま  
 すよ……あゝ未だ——此處に」  
 浪子はばつちりと眼を開きぬ。  
 恰も林端に上れる月は一道の幽光を射て、惘々としたる浪子の顔を  
 照せり。  
 醫師は中將に胸せして、片隅に退きつ。中將は進みて浪子の手を執  
 り。  
 「浪、氣がついたか。阿爺ぢやぞ。——皆此處に居る」  
 空を見詰めし浪子の眼は次第に動き、父中將の涙に曇れる眼と相  
 會いぬ。

「阿爺——御大切に」

ほろ／＼涙をこぼしつゝ、浪子はわづかに右手を移して、其左を握  
 れる父の手を握りぬ。

「阿母」

子爵夫人は進みて浪子の涙を拭ひつ。浪子は其手を執り

「阿母——御免——遊ばして」

子爵夫人の唇は顫ひ、物も得言ず顔打掩ひて退きぬ。

加藤子爵夫人は泣き沈む千鶴子を勵ましつゝ、かほる／＼進みて浪  
 子の手を握り、駒子も進みて姉の床側に跪きぬ。顔く手をあげて、  
 浪子は妹の前髪をかき撫てつ。  
 「駒ちゃん——左様なら……」

言ひかけて、苦しき息をつけば、駒子は打震ひつゝ、一七の赤酒を姉  
 の唇に注ぎぬ。浪子は閉ぢたる眼を開きつゝ、見廻して



「殺一さん——道ちゃん——は？」  
 二人の小兒は子爵夫人の計らひとして、已に月の初めより避暑に赴  
 けるなり、浪子は領きて、や、恍惚となりつ。  
 此時座末に泣き浸りたる幾は、突と身を起して、力無く垂れし浪子  
 の手を森と兩手に握りぬ。

「姥や——」

「あ、あ、あ、嬢様、姥も御一處に——」

泣き崩るゝ幾を纒かに次へ立たしたるあとは、森として水の如くな  
 りぬ。浪子は口を閉ぢ、眼を閉ぢ、死の影は次第に其面を掩はむと  
 す。

中將は更に進みて「浪、何も言遣す事は無いか。——確かり氣を持って」  
 なつかしき聲に呼びかへされて、纒に開ける眼は加藤子爵夫人に注  
 ぎつ。夫人は浪子の手を執り、

「浪さん。何も私がうけ合つた。安心して、阿母の所に御出」  
 幽かなる微笑の唇に上ると見れば、見る／＼險は閉ぢて、眠るが如  
 く息絶へぬ。  
 さし入る月は蒼白き面を照らして、微笑は猶唇に浮べり。然れど浪  
 子は永く眠れるなり。

三日を隔て、浪子は青山墓地に葬られぬ。

交游廣き片岡中將の事なれば、會葬者は極めて衆く、浪子の學友の  
 涙を掩ふて見送れるも多かりき、少しく仔細を知れる者は中將の暗  
 涙を帯びて棺側に立つを見て、腸斷の思をなせしが、知らざる者も老  
 女の幾が吾を忘れて棺に縋り泣き口説けるに袖を濡らしたり。  
 故人は妙齡の淑女なればにや、夏ながらさま／＼の生花の寄贈多か



りき。其中に四十あまりの羽織袴の男が齋らしつるものゝみは、中將の立關より突き返へされつ。其生花には「川島家」の札ありき。

(十)の一

四月あまり過ぎたり。霜に染みたる南天の影長々と庭に臥す午後四時過ぎ、相も變はらざ肥へに肥へたる川島未亡人は、やをら障子を開けて椽側に出て來り、手水鉢に立寄りて、水なきに舌鼓を鳴らしつ。

「松——竹」

呼ぶ聲に一人は庭口より一人は椽側より遠しく走り來つ。恐慌の色は面にあらはれたり。

「汝達は何をしとつか。先日も云つといたぢやなつか。こ、これを見

なさい」

柄杓をとつて、空虚の手水鉢をからくとかき廻せば、色を失へる二人は唯息を呑みつ。

「早よせんか」



耳近き落雷にいよ／＼色を失ひて、二人は去りぬ。未亡人は何か口の中に唸きつゝ、頓て齧らし來し水に手を洗ひて、入らむとする時、他の一人は入り來りて小腰を屈めたり。

「何か」

「山木様と仰有います方が」

言終らざるに、一種の冷笑は不平と相半ばして面積廣き未亡人の顔を蔽ひぬ。實を言へば去年の秋も豊が逃げ歸りたる以後は自づから山木の足も遠かりき。山木は去年以來の戦争に幾萬の利を占めける由を聞き知りて、川島未亡人はいよ／＼以て山木の仕打に不満を懷き、召使に對いて恩の忘るべからざるを説法する毎に、暗に山木を實例にとれるなりき。然も習慣は終に勝を占めぬ。

「通しあはせ」

頓て座敷に通れる山木は幾度か彼赤黒子の顔を上げ下げつ。

「山木さん、久じ振ごあんすな」

「いや、御隠居様、如何も申譯けない御無沙汰を致しました。是非御伺申すでムいしましたが、其の、戦争後は商用でもつて始終彼方此方致して居りました。——先づ御壯健で御目出度ふ存じます」

「山木さん、戦争ぢやしつかい儲つたてごあんそいな」

「へへへ、如何致しまして——まあ御蔭さまで其の、兎や角、へへへ」

折りから小間使が水引かけたる品々を腕も撓に捧げ來つ。「御客様の——と座の中央に差出して、罷りぬ。

ちろり一瞥を臺の上の物に呉れて、やゝ満足の笑は未亡人の顔にあらはれたり。

「此は種々氣の毒でごあんすの、ほへへ」  
「否、如何仕りました。ついほんの、其の——いや、申し後れました」



が、武——若旦那様も大尉に御昇進遊ばして、御勳章や御賜金が  
 いましたそうて、實は先日新聞で拜見致しまして——御目出度  
 ました。で、唯今は何方——佐世保に御出でムいませうか  
 「武てごあんすか。武は昨日歸つて來申した」  
 「へエ、昨日？昨日御歸りて？」  
 「變りもムいませんで？」  
 「相變らず坊ちやまで困いますよ。ほ、ほ、今日は朝から出て、未  
 だ歸いせん」  
 「へエ、其は。先づ御歸で御安心でムいます。いや御安心と申します  
 と、片岡様でも誠に早御氣の毒でムいました。たしか最早百少日も  
 御過ぎなさいましたそうて——併し彼御病氣ばかりは如何も致し方  
 のないもので、御隠居様、流石御眼が届きましたね」  
 川島未亡人は顔膨らしつ。

「彼女の事ぢや、私も實に困りましたよ。錢は遣ふ、件と喧嘩まです  
 る、其結局にや鬼婆の様云はる、得のいかん媳御ぢやつてな、山  
 木さん——加之彼女が死んだと聞いたから、吊儀に田崎を遣つて、  
 生花を喃、遣つたと思いなさい。禮所か——突返へして來申した。  
 失禮ぢやおはんか、喃山木さん」  
 浪子が死せしと聞きし其時は、未亡人も流石によき心地はせさりし  
 が、其のたま／＼贈りし生花の一も二もなく突返へされしにて、萬  
 の感情はさらりと消へて、唯苦味のみ残りしなり。  
 「へエ、それは——其はまた餘りな。——いや、御隠居様——」  
 小間使が捧げ來れる一碗の茗に滑らかなる唇を濕し  
 「昨年來は長々御世話に相成りましてムいませうが、娘——豊も近々に  
 嫁に遣ふことに致しまして——」  
 「お豊どんが嫁に？——其はまあ——そして先方は？」



「先方は法學士で、目下農商務省の〇〇課長を致して居る男で、御存  
 て下さいましやうか、〇〇と申します人て下さいまして、千々岩さんな  
 ども元世話に——や、千々岩さんと申しますと、誠に御氣の毒な  
 未だ若い御方を、残念でございました」  
 一點の鬚未亡人の額を掠めつ。  
 「戦争は嫌なもんでござすの、山木さん。——それで、其の婚禮は何  
 日？」

「取り急ぎまして明後々日に定めましてありますが——御隠居様、如  
 何か一とつ御來駕下さいます様に——川島様の御隠居様が御座り  
 遊ばして御出遊ばすと申しますれば、——手前共の鼻も高ぶら  
 ます譯で、——何卒是非——家内も出ます筈でありますが、其の、取  
 り込むで居ますで——武——若旦那様も何卒——」  
 未亡人は頷きつ。折から五點をうつつ床上の置時計を顧みて、

「あゝ最早五時ぢや。日が短いな。武は如何したる？」

(十)の二

白菊を手に掲げし海軍士官、青山南町の方より共同墓地に入り來り  
 ぬ。

恰も新嘗祭の空青々と晴れて、午後の日光は墓地に満ちたり。秋は  
 此處にも紅に照れる櫻の葉はらりと落ちて、仕切の籬に咲む茶山花  
 の香ほのかに、線香の煙立上る邊には小鳥の聲幽に聞へぬ。今井町  
 の方に過ぎし車の音微かになりて消へたる後は、寂けさ一入増り、  
 唯遙かに響く都城の鶯々の、此寂寞に和して、彼現と此夢と相共に  
 人生の哀歌を奏するのみ。  
 生籬の間より衣の影閃々見へて、頓て出て來し廿七八の婦人、眼を



下、何故  
川島守直  
るはして  
るはして

赤うして、水兵服の七歳許の男児の手を引きたるが、海軍士官と行

きすりて、五六歩過ぎし時、

「阿母、彼叔父様も矢張海軍ね」

と云ふ子供の声聞へて、婦人は手巾に顔を抑へて行きぬ。其とも知

らぬ海軍士官は、道を考ふる様に屢々立留りては新しき墓標を讀み

つゝ、不圖一等墓地の中に松櫻を交へ植へたる一劃の埜域の前に到

り、顔きて立止まり、垣の小門の門を揺かせば、手に従つて開きつ。

正面には年経たる石塔あり。士官は突と入りて見廻し、横手に猶新

しき墓標の前に立てり。松は墓標の上に翠蓋を翳して、黄ばみ紅ら

める櫻の落葉點々として之を繞り、近頃立てしと覺ふる卒塔婆は簇

々として之を護りぬ。墓標には墨痕鮮やかに「片岡浪子之墓」の六

字を書けり。海軍士官は墓標を眺めて石の如く突立ちたり。

良久ふして、唇顫ひ、嗚咽は喰ひしばかりたる齒を濡れぬ。

\* \* \* \* \*

武男は昨日歸れるなり。

五ヶ月前山科の停車場に今此墓標の下に臥す人と相見し彼は、征臺

の艦中に加藤子爵夫人の書に接して、浪子の己に世にあらざるを知

りつ。昨日歸りし今日は、加藤子爵夫人を訪めて、午過ぐるまで其

話に胸を断ち今此處に來れるなり。

武男は墓標の前に立ち吾を忘れて良久しく哭したり。

三年の幻影はかほる、泪の狭霧の中に浮みつ。新婚の日、伊香保

の遊、不動祠畔の誓、返子の別墅に別れし夕、最後に山科に相見し

其日、此等は電光の如く取次に心に現はれぬ。「早く歸つて頂戴！」

と云ひし言は耳にあれど、一度歸れば彼女は已て我家の妻ならず、

二度歸りし今日は已に此世の人ならず。



あゝ、浪さん、何故死んでしまつた。  
 吾れ知らず言いて、涙は新に泉と湧きぬ。  
 一陣の風頭上を過ぎて、櫻の葉ははらくと墓標を撲つて蹴りつ。  
 不圖心づきて武男は涙を押し拭ひつゝ、墓標の下に立寄りて、やゝ萎  
 れたる花立の花を抜き棄て、持て來し白菊を挿み、手づから落葉を  
 掃ひ、內衣兜をかき探りて一通の書を取り出でぬ。  
 此は浪子の絶筆なり。今日加藤子爵夫人の手より受取りて讀みし時  
 の心は如何なりしぞ。武男は書を抜きぬ。假名書の美しかりし手跡  
 は痕もなく、其人の筆かと思ふ迄字は震ひ墨は泥みて、涙の痕斑々  
 として残れるを見ずや。  
 もはや最期も遠からず覺へ候まゝ一筆残しあげり。今生にては御  
 目もじの節もなきことと存じ居候ところ天の御憐れみにて先日  
 不慮の御目もじ申しあげ嬉しく併し瀛車内のこととて何も心

197/6/13

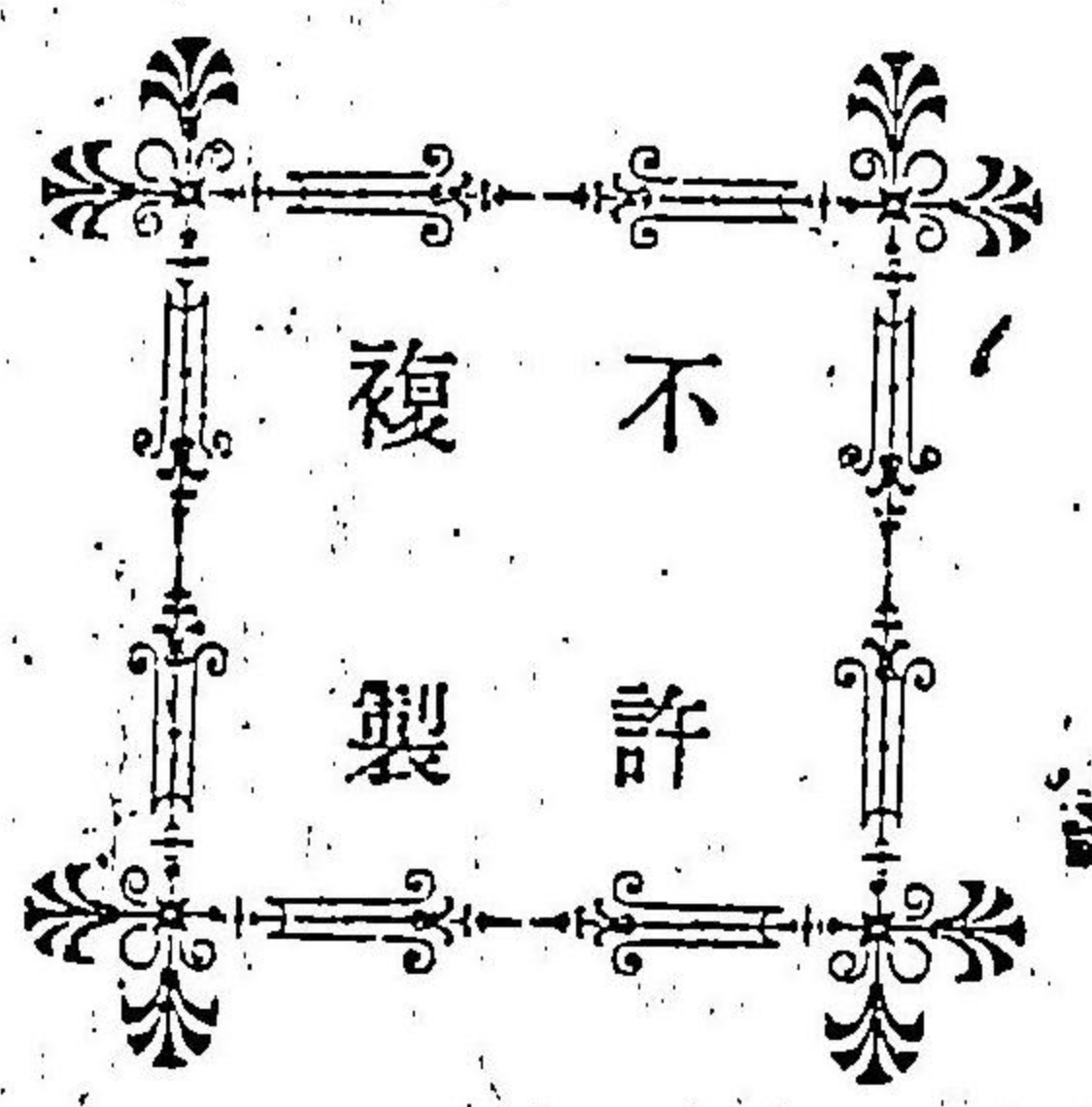
に任せ申さず賊に、殘多く存上り。  
 車の窓に身を悶へて、藁色の手巾を投げし其時の光景は、歴々と眼  
 前に浮びつ。武男は眼を上げぬ。前には唯墓標あり。  
 儘ならぬ世に候へば何も不運と存じ誰も恨み申さず此まゝに身は  
 土と朽ち果て候ふとも魂は永く御側に付き添ひ――  
 「阿爺、誰か來てますよ」と涼しき子供の聲耳近に響きつ。引つゝい  
 て同心聲の「阿爺、川島の兄君が」と叫びつゝ、花を握りたる十許  
 りの男兒武男が側に走り寄りぬ。  
 驚きたる武男は、浪子の遺書を持ちたるまゝ、涙を拂つてふりかへ  
 りつゝ、恰も墓門に立ちたる片岡中將と顔見合はしたり。  
 武男は頭を低れつ。  
 忽ち武男は無手と吾手を握られ、ふり仰げば、涙を浮べし片岡中將  
 の双眼と相對いぬ。人生哀傷多ししかも悽烈此の如きは稀也







明治三十六年四月二十日  
廿八版印刷發行  
明治三十六年五月十七日  
廿九版印刷發行



發行者

東京市京橋區日吉町四番地

渡邊為藏

印刷者

東京市京橋區日吉町四番地

齋藤剛

印刷所

東京市京橋區日吉町四番地

民友社

發行所

東京市京橋區日吉町四番地

民友社

45-47



96

86



